刺戟性食物

る。酒毒は亦、遺傳するもので、酒毒より來たれる流産は、其の娘に遺傳して、流産を起こさしむることもある。

刺戟性食物とは、辛烈なるものにして、隨分流産の原因となる。卽はち

一　山葵（持に熱湯にて浸出したるもの）、

二　唐辛、

三　辛（辛菜も同樣）、

四　胡椒、

五　生薑（生又は鹽漬を問はず）、

等の類にして、大根の汁、南瓜も宜しくない。これは胎兒の健康を害するもので、箇樣な食物を喰べた許りに、流産を招いた例は少くない。

間接原因

第二の間接原因　卽はち胎兒の營養を妨ぐるものは、劇烈なる震動、打撲、臍帶の異常、胎盤の異常、房事、乳房の刺戟及び劇烈なる精神感動等であつて、何れも間接の原因となるのである。以下順次に、之れを說述するであらう。

劇しき震動

劇しき震動と流産とは、大なる關係があつて、震動は姙婦の愼しまざるべからざるところのものである。これ姙婦の攝養の條に於いて、述べた如く、劇動の爲めに、流産を來たすことが多くある。

それより流産を起こす原因

何故に、震動は流産を招くかといふに、これは母體と胎兒と連絡して居る血管、卽はち臍帶動脈、及び臍帶靜脈が、震動の機會に、突然切斷したり、或ひは胎盤が離れたりする爲めである。恁ふなると、胎兒は健全でも永く胎內（子宮）に、留まつて居る譯に行かぬから、早く產出するのである。

震動の種類

斯くの如くに、母體に震動を傳へて、流産の原因とならしむるものは、既に記した如く

一　過劇なる運動、

二　疾走（例へば競走の如き）
三　馬車、
四　人車、
五　電車、
六　自働車、

等の類で、重い物を、高いところへ揚げたり、或ひは荷つたり、或ひは梯子を昇降したりするのは、みな流産の原因となるのである。

打撲

打撲は、特に恐るべきもので、之れから流産を來たすことが多い。轉倒して流産を起こすことあるのは、打撲の爲めで、特に腹部の打撲は、危險である。

臍帶及び胎盤の異常

臍帶及び胎盤の異常は、血液の循環を妨げて、胎兒の營養を不良ならしむる爲めに、流産を來たすのである。

房事

房事より流産を起こすことも少なくない。特に月を重ねたものは、腟が短くなつて、子宮は壓迫を受け易いので、早産を起こすことが多くある。

乳房の刺戟

乳房の刺戟から、流産を來たすことも、稀れでない。これは乳房と子宮との間に、神經の連絡があつて、乳房を刺戟すると、子宮が收縮を來たすからである。

精神感動

精神感動の、妊娠に大なる影響を與ふることは、既に說明した如くであるが、之れが爲めに流産、若しくは早産を來たした例は、少なくない。彼の出火、洪水、地震、雷鳴等の際に、急に産氣の附いて、分娩することのよくあるのは、全く精神感動の爲めで、此の場合には早産が多い。

第四節　流産及び早産の徵候及び其の應急手當

如何なる徵候があ

流産の徵候は、其の月に依つて一樣でないが、先づ初妊婦で、初期の中

るか初期に於ける流産

は、何の變はりもなくして、突然に來ることが多い。恁ふいふものになると、流産があつても、月經の滯つて居たのが、急に來たものゝやうに思つて、姙娠して居たことも、心附かずに居ることがある。

月を重ねたるものゝ流産

併し、多く月を重ねた姙婦になると、分娩の時のやうに、陣痛を起こし時としては、非常に苦悶することもある。孰れにしても、出血をもつて始まるものであるから、姙娠中に故なくして、子宮出血を來たすことがあつたならば、速かに專門醫に診て貰はなくてはならぬ。

出血の多量なる場合

若し、出血が甚はだしいときは、腦貧血を起こして、卒倒したり、或ひは失神したりすることがある。さういふ場合には、醫師の來るまでの手當として、速かに膣に脱脂綿の、栓塞を施し、姙婦を靜かな室に運んで、安臥せしめなくてはならぬ。

胎盤生成後に於ける

又、早期に於ける流産では、未だ胎盤が生じてないから、單に血塊を下

すに過ぎないけれども、四ケ月以後に起こる流産にあつては、胎兒は勿論其の胎盤も、胎膜もみな排出するので、其の際特に注意しなければ、將來に禍ひを殘すことがある。それは胎盤の一部分でも、子宮に殘つて居ると永く出血が止まらないで、貧血に陷り、又は子宮病となつて、惱むことがあるから、流産したときは、一應專門醫に診て貰ふがよい。

早産の症狀

早産のときは、其の經過が、普通の分娩に類するので、危險の度は、却つて流産よりも少ないものである。孰れも産後には、産褥熱を起こし易くあるから、十分に注意しなくてはならぬ。

注意すべきこと

第五節　流産の豫防

流産は、まだ多く月を重ねない中ほど、多くあることは、前に述べた如くであるから、姙婦はそれを忘れてはならぬ。又、流産は、若い者よりも

年を老つたものに多くあるから、これも心得なくてはならぬ。

そこで流産、及び早産を、豫防するには、前の事實に依つて、注意を拂ふことが勿論、一般に、妊娠中の攝養法を、守るにあること言を俟たぬ。其の要領を摘んで言へば、次ぎの如くである。

一　適宜の運動は、爲さなくてはならぬけれども、決して過劇に亘つてはならぬ。

二　又、過度の運動でなくとも、ゆさぶる運動、怒責むこと、永く腰を屈すること等は避けなくてはならぬ。

三　轉倒したり、腹を打つなど、外傷を受けないやうに、注意せねばならぬ。

四　重い物を持ち運び、又は二階を昇降することなども、してはならぬ。

五　感冒の用心をせねばならぬ。特に流行性の感冒は、流産を來たすこと甚だ多くある。

六　寢冷えをせぬやうに、注意しなくてはならぬ。腹を冷やした爲めに、流産の起ることも少なくない。

七　毎日溫浴を取つて、身體を暖むることが、最も宜しくある。

八　房事は愼しみ、或ひは全く禁ずること。

九　精神は安靜にして、感動を避くること必要である。

十　急性傳染病、花柳病、其の他の重患に罹からざるやう、注意することを忘れてはならぬ。

第三編　如何に産兒を保護すべきか

緒說

嬰兒は草花の芽に等しい

人類を植物に喩へて見ると、嬰兒は恰かも、草花の芽に等しく、極めて軟弱なものであることは、言ふまでもない。芽が成長して、大きくなれば美しき花を開いて、人に賞翫せらるゝが、それまでになる間の芽の保護といふものは、一通りでない。尤も此の保護は、自然に供つて、別に人力を要しなくとも、成長して行くが、人間はさういふ譯には行かぬ。初生兒の際は、何ものよりも微弱にして、少しでも保護を加へなければ、外界の刺戟に堪えないで、忽ち死亡して了う。これは何人も知るところである。

獸鳥の幼兒は母の

人間ばかりでなく、獸や鳥でも、初生兒には、保護が必要である。併し

保護を要することが少ない

人間の嬰兒は母の懷に抱かれねばならぬ

人間ほど、手の懸かる保護はない。例へば鷄の孵化して、雛兒の卵から出たときは、極めて弱いが、それでも親鳥に附いて、歩むのみならず、食物も探して、食べることも知つて居る。家鶩や、鴨の如きは、雛が孵化すると直ぐ、水を游ぐといふやうに、母の手を煩はすことは少なく、みな自然に保護せられて居る。

然るに人間の嬰兒は、中々爾ふ容易くは行かぬ。第一歩むことは勿論、自ら食することすら出來ないのであるから、一々母が乳を授けて、養育しなければならぬ。これが人間の特性で、生まれ赤子が、直ぐに歩いたり、物を食べたりしたならば、それこそ怪物であらう。先づ、生後の一年間といふものは、母の懷中に抱かれて、十分に保護せらるゝ時代と、謂ふべきである。特に初生の際は、最も緻密なる注意が肝要で、之れを誤ると、不慮の災害に罹かり、或ひは疾病を釀して、死亡することが多い。

然らば嬰兒の保護は、何うすればよいかといふに、之れに大體、次ぎの五種類がある。卽はち

第一　初生時の取り扱ひ、
第二　自然的養育法、
第三　人工的養育法、
第四　難産の豫防、
第五　死亡の豫防、

にして、何れも大切であるが、分けて第一は、小兒の初めて、外界に出たときであるから、最も深き注意を拂はねばならぬ。

それから第二は、人の乳で育てるもの、(卽はち母の乳、又は乳母の乳で育てるもの)、第三は、人乳以外の營養品をもつて、養育するものである。第四は、母體と關係があつて、分娩を容易ならしむるのであるが、それが

畢竟、産兒を保護することゝなる。最後のものは、産兒の死亡を豫防するもので、必要である。

右の如く、嬰兒の養育には、自然法と、人工法とあるが、其の自然といひ、人工といふのは、全く天性に遵ふと、否やとにあるので、自然的營養法は、又

一　生母乳養育　生母の乳にて育てるもの、
二　乳媼乳養育　乳媼の乳にて育てるもの、

の二種に分かれ、後者にも

一　牛乳養育　專ら牛乳にて養育するもの、
二　馬乳養育　主として馬乳にて育てるもの、
三　山羊乳養育　これ山羊乳にて育てるもの、

等の種類がある。

産兒保護の上に於いて最も重大なる問題

けれども嬰兒の養育として、最も適當なものは、生母乳養育であつて、他の養育法は、生母に疾病、若しくは乳不足等の、事情ある場合に、代用せらるゝものである。嬰兒の完全に育つと否やとは、一に養育法の如何にあるので、産兒保護の上に於いて、此の養育法は、最も重大なものである。

第一章　初生兒の取り扱ひ法

産兒の取り扱ひを知りおく必要

産兒の取り扱ひは、産婆のすることで、それに一任して置いてよいのであるが、併し素人にても、之れに關する一通りの知識を有すると、有せざるとに依つて、大なる利害のあることを、忘れてはならぬ。

第一節　臍帶の切り方及び産浴の使ひ方

先づ子が産まれたならば、直ちに消毒綿、若しくはガーゼをもつて、其の目と口とを、注意して拭はなくてはならぬ。それには布片を、二通り用意して、目を拭ふものと、口を拭ふものと別々にしなくてはならぬ。かく目を拭ふのは、初生兒の目に毒が入ると、恐るべき眼病を起こすことがある爲めである。

目と口とを清潔にすること

注意

それから其の子を、暖かなタオルに包んで、寒冷を避けなくてはならぬが、其の際蒲團、若しくは母の股などにて、嬰兒を壓迫せぬやうに注意することが肝要である。これは世間に、例のあることで、折角生んだ子を、誤つて壓殺することがある。し、或ひは壓殺するまでに行かなくとも、不具癈疾にすることなどがある。特に産婦が急癇を起こすと、此の危險が一層大である。

臍帶の切り方

斯くして、約十五六分を過ぎて、臍帶の搏動が止んだならば、嬰兒の臍から、凡そ三寸位離れたところを、清淨な結紮糸(麻糸)をもつて、中の間

臍帶を結紮する時期

五分許り隔てゝ、二箇所固く結紮して、其の間を、よく消毒した鋏で、切斷するのである。

此の臍帶を結紮するには、必らず臍帶の搏動が、止んでからせねばならぬ。それまでは、まだ産兒は母體と連絡して居るのであるから、結紮してはよくない。

産湯

産湯を使はせる所以

箇樣に、臍帶を切斷してから、産兒を母の股間かり取り出して、豫ねて準備して置いた、盥の中へ入れて、沐浴をさせるのである。これが卽はち産湯で、湯の溫度は、攝氏の三十六度が適度である。さうして此の産湯を使はせるには、産兒を布に包んだまゝ、湯へ入れて、叮嚀に洗ふのである。

産湯は何の爲めに使ふものであるかといふに、これ單に、嬰兒の身體を清潔にする許りでなく、又、嬰兒の身體を暖め、血液の循環をよくして、生活機能を活潑にする目的もある。

湯の溫度及び之れを定むる方法

湯の溫度は大切で、前に言つた溫度より、高くても、又は低くてもよくない。西洋では、三十五度を普通として居るが、日本人は熱浴を好むところから産湯まで、熱くしたのかも知れぬ。それはさうと、湯の溫度を加減することは、餘程熟練した上でなければ、手心で之れを定むることが、難かしいから、寒暖計を用ひて、計つて見るのが一番宜しくある。さうして

顏の洗ひ方

顏、頭、頸、胴、手、足と、順々に洗ふのである。

それから顏を洗ふ湯は、別の洗面器に取つた溫湯に、**ガーゼ**の類を浸して、目、口、鼻、耳から、顏、頭と洗ふのであるが、眼を洗ふときには、決して不潔な布片を用ひてはならぬ。又、湯を眼の中に、入れないやうに外眥から、內眥の方へ、拭つて、決して手荒にしないやうに、注意しなければならぬ。

膿漏眼結膜炎

不潔な布片を用ひたり、湯が眼の中に入つたりすると、眼病を惹起する

クレーデ氏點眼法

ことがある。特に、母に痳疾があつた場合には、尙更に、注意しなければ膿漏眼結膜炎といふ、眼病を發して、生まれも附かぬ盲目となることが多くある。此の膿漏眼は、次いで眼球炎を起こし、角膜に潰瘍を生じて、遂に失明するに至るものである。

それで初生兒には、必らず**クレーデ氏點眼法**を行はなければならぬ。これは五十倍の硼酸銀水であつて、其の一滴を點眼するのである。

口中の洗ひ方

それから初生兒の口中を洗ふには、指頭に消毒綿を捲いて、靜かに其の口内に、附着せる粘液を除かなくてはならぬ。又、胴を洗ふときには、頸や、腋窩や、其の他股間、肛門の邊をよく、注意して、清潔にし、而して皮膚の胎脂(生まれながらの垢)が、普通であるときは、上等の石鹸で洗ひ

胎脂の洗ひ方

若し厚く附着して、容易に落ちないときは、

一　オリーフ油、

二　雞卵(搔き廻はしたもの)、

三　糠、

の類を用ひて、洗ふときは、大抵綺麗になるのである。尤も胎脂を、一時に除かんとして、長く皮膚を摩擦するのは、宜しくないから、漸々にしなければならぬ。

産兒の身體を檢すること

次ぎに産湯を使はせるときに、産婆は嬰兒の全身を改めて、畸形、負傷骨折等の有無を、檢しなくてはならぬ。若し斯くの如き者を、發見した場合には、直接に褥婦に知らしてはならぬ。何故といふに、褥婦は、神經が亢奮して、少しの精神感動にも、逆上して死ぬことがあるからである。それで縱令ひ、畸形の子でも、直接に褥婦には知らせないで、其の附き添へのもの、或ひは其の夫なり、母なりへ密つと告げるがよい。

畸形に就いての注意

畸形の中にて、特に注意すべきものは、鎖肛と稱するものである。之し

臍帶の消毒

は先天に、肛門の閉鎖したもので、其の儘にして置けば、胎兒糞を下すことが出來ないで、死亡するから、速かに醫師の診斷を受けねばならぬ。それから半陰陽といつて、兩生殖器を具有するものは、別に生命には關係がないけれども、放擲して置くべきものでない。

産湯の時間は、約十分間で、産兒を湯から取り上げたならば、乾いた柔かな溫布をもつて、身體の濕潤をよく拭ひ取つて、暖な衣服を着せるのであるが、其の前に臍帶を檢して、結紮が完全であるときは、其の臍帶殘留部、卽はち斷端に、消毒藥を撒布して、脫絲綿を宛て、其の上を緩く繃帶するのである。繃帶の巾は、二寸位で長さは二尺もあれば、十分である。

消毒藥

消毒藥としては、硼酸末が宜しい。石炭酸は嬰兒の爲めに、大毒であるから、臍帶の消毒には、避けなくてはならぬ。

繃帶の取り扱ひ

臍帶を卷いた繃帶は、沐浴を行ふ度に、必らず取り換へ、臍帶の自ら脫落するまでは、取り換へることを忘れてはならぬ。さうして其の處置を爲すときは、必らず母に先だちて、母の後に廻はしてはならぬ。何となれば母の不潔物が、嬰兒の臍帶に移るときは、恐るべき炎症を來たすからである。

完全なる繃帶の仕方

完全なる繃帶の仕方は、三寸に六寸のガーゼを採り、之れを縱に二つに折り、折り目のところの中央は、鉛直に、上方に一寸五分許り切り、而して、其の上の切り端に、横に更に其のガーゼを一寸許り切るのである。然るときは其のガーゼに、丁字形の切り口が出來るであらう。其の切り口に臍帶斷端を入れて、斷端を纏包するのであるが、斷端は纏包後、之れを上方に向け、腹部に當てゝ、臍帶繃帶を施すのである。

産湯の日數

入浴は、夏は成るべく毎日行ひ、冬は三日或ひは四日目位でよいが、室は暖かにして、障子の破れから、盜風の入らぬところで、行はなくてはな

臍端脱落後の注意

産衣

らぬ。

それから臍帶斷端の脱落は、大抵五六日間で、自然に脱落するまでは、決して引つ張つて取るやうなことをしてはならぬ。さうして脱落後も、脱脂綿或ひは**ガーゼ**を宛てゝ、繃帶して置かなくてはならぬ。時としては不潔物の爲めに、臍の發炎して、それから生命を失ふやうな、大事に至ることがある。

前述の産浴が濟んだならば、豫め用意して置いた産衣を、着せるのであるが、産衣は成るべく輕くして、暖かなのがよい。其の暖かさは、時候に應じなければならぬが、今まで母の胎内に宿つて居たものが、俄かに外界に出でて、急激の變化を受けるのであるから、普通よりも、暖かにしなければならぬ。併し餘り暖かにするときは、皮膚を蒲弱にする恐れがあるから、注意せねばならぬ。要は中庸を得るにあつて、謂はゆる寒からず、暑

初生兒の寢床

寢室

注意

からずのところを、採らなくてはならぬ。

次ぎに初生兒の寢床も、前と同じ理由で、普通よりも、暖かにしなければならぬ。冬には湯**タンポ**の類を入れて暖め、夏には其の用はないけれども、決して冷かにしてはならぬ。

それから寢室であるが、嬰兒はよく、眠らさなければならぬから、閑靜な室に、寢かして置くことを忘れてはならぬ。勿論、母の寢室に、一所に置いて、差し支へないが、清潔と、暖かといふことには、呉れ〴〵も注意しなければならぬ。

寢室が、若し餘り明るく、或ひは風が入り過ぎるやうであつたならば、小屏風を枕頭に立てゝ、之れを遮ぎり、又、夏で蠅の多いときは、蚊帳を釣り、且つ寢床の周圍には、蚤取粉を撒布して、之れを防ぐことが必要である。

第二章　自然的養育法

自然的養育法の意義

自然的養育法とは、生母、若しくは乳媼の乳にて、其の子を養育するのであるから、又、自然的授乳法ともいふ。今、之れを述ぶるに先だつて、初乳と尋常乳との區別、及び其の成分等を說かなくてはならぬ。

第一節　初乳とまくり

初乳の由來

母乳の最初に分泌するものは、初乳といつて、通常の乳ではない。此の初乳は、分娩してから、初めて出るやうに思ふ人があるが、さうでない。妊娠して居る時から、既に、乳腺中に釀生せられて居るので、乳房を搾ると、少しは分泌する。それが七八ケ月頃になれば、斷々多く出るやうになる。然し胎内に胎兒の宿つて居る中は、もとより分娩しても、直ぐに多く出るものでない。

初乳の性質

此の初乳なるものは、稀薄なる水樣液の、乳汁で、顯微鏡下に之れを檢すれば、初乳球、乳球及び腺細胞、及び白血球等を含み、化學的には蛋白質、脂肪、乳糖及び鹽類等より、成るのである。此の初乳球は、數多の脂肪の、結合したものであつて、鹽類には、多く燐酸加里、酸化**マクネシウム**等が含まれて居る。

初乳の化學成分

初乳は、分娩後三四日より、尋常乳に移行するものであつて、八日頃に至ると、全く出なくなるが、其の化學成分は、次ぎの如くである。（**プアイフエル**氏）

成分	百分比例
蛋白質	六・六（三―九）
脂肪	二・五

乳糖類

三・六

〇・三一二

尋常乳との比較

之れを大ぎに述ぶるところの尋常乳と比較すると、蛋白質と、鹽類とが多くして、脂肪と、乳糖との少ないことが、其の異なるところである。

初乳を哺ませなかつた理由

右の成分に依つて見ると、初乳は嬰兒を養ふに、不適當なるものではないが、昔からの習慣として、之れを初生兒に飲ませると、惡いとしてある。それは何ういふ理由かといふに、初乳を、生まれた許りの嬰兒に哺ませると、成分が強い爲めに、下痢を起こすからよくないといふことである。昔の人の經驗に依れば、初乳は二三ケ月過ぎた小兒に、哺ませても、下痢をするほど、腸を刺戟するものであるから、初生兒にはやらない方がいゝといふことである。

まくり

それで初乳の代はりに、「まくり」とか、五香とか稱するものを飲ませ、

初乳を有害とする理由

今日にては田舍に行くと、矢張昔風に、母の初乳を棄てゝ、二三日間は、此のまくりや、五香の類をもつて、育てるところがある。これは獨り田舍ばかりでなく、都會にても往々見るところである。果たして初乳が害があつて、まくりは良いものであるか、左に少しく之れを說述するであらう。

さて初乳を、有害として哺ませないのは、前述の如く、下痢を起こす點にあるが、これは初乳中に、比較的多量に、含まれてある鹽類の爲めであるが、然し初生兒は、生理上通利を必要とするもので、これがないと、胎生中に溜つてある胎糞、卽はち俗にいふかにばゝを、排出することが出來ないから、初生兒の大害となる。語を換へて之れを言へば、初生兒には通痢が大切で、之れを促す爲めに、まくりを飲ませるのであるが、初乳は自然に適度の通痢を起こすやうに、出來て居るので、殊更にまくりを飲ませる必要がないのである。

まくりの成分

それから一方のまくりであるが、これは海仁草（又海人草ともいふ）と稱する、鹿角菜に似た海草に、種々の成分を調合したものである。其の主なるものは、大黄、甘草、葛の根、或ひは木通の莖等で、つまり一種の下劑に過ぎぬ。何故斯ふいふ下劑を、初生兒に飲ませるかといふに、それは前に言ふ如く、胎毒を下すといふ考へから、用ひたのが習慣となつたのである。

まくりを飲ませる必要はない

然るに初乳は、天然の下劑にして、胎糞を下すには、極めて適當して居るから、之れを廢して、まくりを飲ませる理由のないことは、重ねて言ふ必要はない。

胎毒の意義及ひ其の胎糞との區別

舊來の人は、動もすれば、胎毒々々と言つて、胎毒なるものが、何れの初生兒にも、必らずあるものゝやうに思つて居るが、それは大なる間違ひである。醫學上より言へば、胎毒とは獨逸語のアングボレネ、ジフイリス、或ひはジフイリス、コンゲニタ（Die angeborne Syphilis, Syphilis congenita.）卽はち先天性黴毒のことであつて、何人にもあるものでない。之を有するものは、唯だ黴毒に罹かつた親から、生まれた子で、健全な親の子に、胎毒のあらう道理はない。又、此れ等の先天性黴毒を有するものとしても、その毒は身體の組織、或ひは血液の中に、潛伏して居るものであつて、胎兒の腸管內に、殘溜して居るものではない。胎兒の腸管に貽つてあるものは、彼の胎糞ばかりで、これは凡べての胎兒にあるが、此の胎糞は胎毒ではない。それであるから、假りに、此の先天性黴毒のある初生兒としても、其の黴毒が、單に丸くり如きもので、驅除せらるゝものでないことを記憶せねばならぬ。

此の習慣を改めよ

如上の事實に依つて見ると、まくりは全く無益のもので、何の役にも立たんのであるが、醫學の開けざる時代に初乳を、有害と誤解した結果が、

初生兒は直ぐに授乳させなくてもよい

之れに代はるべく、まくりを用ひる習慣を、養成したのである。此の習慣は、改める方がよい。

さて、初乳は、分娩後、二三日になると、漸くに濃くなつて、四日頃から尋常の乳が出るやうになることは、前に述べた通りであるが、然し初乳が必要であるからといつて、直ぐに之れを飲ませなくてはならんといふ理由はなく　初生兒は分娩後、半日や、一夜位は、何も飲ませなくとも、空腹になることはないのであるから、分娩後は十分に眠むらして置いて、それから與へるとよい。其の時期は、大抵分娩後八時間、或ひは十時間で、西洋では八時間を經過しなければ、與へないことになつて居る。

第二節　尋常乳

尋常乳の白色不透明

尋常乳は、分娩後三四日頃から生ずる乳で、初乳と異なり、白色不透明である。普通に乳といふのは、尋常乳のことで、之れを顯微鏡にて檢すると、多數の乳球が認めらるゝ、乳球は強く光線を屈折する性があつて、其の數が夥しいので、尋常乳は、白色不透明に見える。これは丁度血液中に血球が無數にある爲めに、赤く見えるのと同じ理である。

乳球の數

此の乳球は一體、何れ程含まれてあるかといふに、**ボール**氏の調査に依れば、立方七センチメートルの乳汁中に、凡そ二百六十萬乃至一千百四十萬もあるといふことである。

人乳の成分

それから人乳の化學成分は、**ブアイフエル**氏に依れば、

成分	百分比例
蛋白質	二・〇(一・一—二・七)
脂肪	三・五(二・〇—七・〇)
乳糖	四・八(三・二—六・二)

日本人の乳と歐洲人の乳

鹽　類　　〇・一七

で、これは歐洲人の成分であるが、他の人種に於いては、之れと同一でない。又、人乳の成分は、年齢、職業、及び生活狀態等に依つても、異るものである。語を換へて之れを言へば、年齢の關係に於いては、若き婦人の乳汁は、蛋白質及び脂肪に富み、乳糖は乏しけれども、二十歳以後三十歳の婦人は、之れに反して蛋白質が乏しく、乳糖が多くなる。

又、日本婦人と、歐洲婦人とを比較して見ると、日本人の乳は蛋白質、脂肪及び鹽類が少なくして、乳糖が多く、歐洲人の乳は全く之れに反して居る。左表は日本人の乳汁である。

成分	百分比例
蛋白質	一・五三
脂肪	二・九七

尋常乳と初乳との比較

乳汁の分泌量

乳　糖　　七・六一

鹽　類　　〇・一六

何れにしても、尋常乳には、蛋白質と鹽類とが少なく、之れに反して乳糖の多きことが、知らるゝであらう。（前項初乳の成分と比較せよ）

尙、乳汁に就いて、大切なことは、其の分泌量である。乳は人に依つて多く出るものと、少ないものとあるが。これは其の人の體質や、遺傳の關係である。それ許りでない、營養や、生活狀態や、又は、授乳法の如何等も、與つて力がある。**ロンメル**氏の調査に依ると、乳母には、一日平均一千瓦から、三千乃至四千瓦を、分泌する者がある。併し斯くの如きものは、例外と看做すべきで、普通は平均六百乃至一千瓦である。**ブアイフエル**氏が、普通の產婦に就いて、調査したものに依ると、其の一日の分泌量は、平均次ぎの如くである。

分娩後	分泌量（單位瓦）
一週間	二五〇
五週間	六八〇
二ヶ月乃至七ヶ月間	八六〇乃至一・〇五〇

第三節　授乳の方法

初めて乳を飲ませる時間

母乳を、初生兒に哺ませるのは、産まれてから、八時間乃至十時間過ぎてからが、丁度適當で、それ前は、與へなくとも差し支へのないことは前に言つた通りで、泣いたから、飲ませなくてはならぬといふ譯はない。初生兒の泣くことに就いては、後章に詳述するが、初生兒は、空腹の爲めにばかり、泣くものでないから、心配しないで、それよりも産婦は、一寢入りして、十分に心身を落ち着くるがよい。

乳房の消毒

爾ふすると、心身の落ち着くと共に、乳腺が張つて、乳が出るやうになる。そこで乳嘴、乳暈は勿論、乳房を石鹸及び溫湯をもつて、十分に洗ひ清むることが必要で、此の消毒に、五十倍の硼酸水、或ひは亞爾個保兒なれば、尙宜しくある。

乳の與へ方

斯くして消毒した乳嘴を、靜かに嬰兒の口中に挿し込むのである。すると初生兒は、本能的に、乳房を吸吮するに依り、乳汁は自ら嬰兒の口に分泌するやうになる。併し其の乳汁は、初めから多量でなくとも、妨げはない。二三滴でも、初めは十分で、漸々に分泌が多くなるに從つて、其の量を增し與へるやうにするがよい。

嬰兒の吸ひ着けぬ乳房と乳の出ない乳房

然るに玆に、二つの困難なことがある。それは母の乳房が、小さいか、或ひは引き込んで居て、嬰兒の吸ひ着けない、場合のあること、他の一は乳汁のよく出ないことである。

乳房を無闇に摘み出してはならぬ

右の如く、乳房が深く陥没して、年が若くして、十分に初生兒の吸ひ着き難いものは、乳房の發達してない者に多く、後者は、營養の不良なるものなどに、多くある。恁ふいふことに出會すると、産婦は勿論、附き添ひの人々が心配して、乳房を揉んだり、摘み出したり、種々のことをするが爾ういふ性質の乳房は、幾ら摘んだとて、急に出るものでない。もと〳〵乳房は、人の性質に依つて、隆起の大なるものと、小なるものとあるが、それは初めて、乳を飲ませる時ばかりで、一度嬰兒が吸ひ着けば、乳房が吸ひ出されて、自然に膨大するものであるから、無闇に引つ張つたり、摘んだりしてはならぬ。何となれば餘り烈しく、乳房を刺戟すると、それが爲めに負傷したり、或ひは膿炎して、乳房腺などに罹かることがあるからだ。

搾乳器

といつて窪んだ乳房を、其の儘にして、置くと、嬰兒に飲ませることが出來ないばかりでなく、母の爲めにも良くないから、産科醫なり、又は産婆なりへ相談して、搾乳器を用ひなくてはならぬ。これは硝子で製した、コップの如くになつた球に、護謨球を附けたもので、其の窪んだ面を、乳房へ覆ひ當てゝ、護謨球を嬰兒に吸はせると、直接に乳房を吸ふと同じく乳汁が出るのみならず、乳房も次第に膨脹するものである。此の搾乳器は乳房の窪んだものばかりでなく、乳腺が餘り緊張して、烈しく分泌するものにも、之れを用ひると、程よく之れを調節して、飲み易くなるものである。

乳汁の不足

次ぎに乳汁の不足は、最も憂ふべきことで、これは決して、等閑に附することが出來ぬ。一體何ういふ理由で、乳に不足なものがあるか、それは外見に依つて、知ることが出來るが、其の原因や、之れに對する手當、及び注意等が、必要であるから、次ぎに項を改めて説述するでならう。

乳汁の初生兒に及ぼす影響

第四節　乳汁の鑑定、乳不足及び斷乳

初生兒は、身體最も薄弱で、抵抗力が極めて微弱であるから、少しの刺戟にも、害を受くることは、人の熟知する如くである。特に乳汁の如く、嬰兒の唯一食物となるものゝ影響は、著しくして、其の良いと、惡いとは嬰兒の發育に、大なる關係のあることを、忘れてはならぬ。

善良なる乳汁

それで如何なる乳汁は、善良で、嬰兒に哺ませるに適當するか、之れを知ることが必要である。先づ乳房を搾つて、乳が線狀に彈出するのは、乳量の多い徵候で、其の色は雪白である。これは脂肪に富める爲めで、斯かる婦人の乳房は、累々として充實し、靜脈は怒潮して、乳嘴もよく發達して居る。それがよく張るものになると、搾らなくとも、乳汁が獨りでに漏れて、胸に手拭か、手巾を當てなければ、胸の衣類を通して、腐らすことがある。

不良なる乳汁

之れに反して、乳房の充實が少なく、搾つても、線狀に彈出することなく、僅に出て、其の色の青味を帶びて居るのは、其の量の少なきのみならず、固形分も不足である。これは良い乳でないから、さういふ乳の婦人は專門醫に診て貰はなくてはならぬ。

乳不足より來たる嬰兒の異常

箇樣に、乳不足の時は、分娩後三四日を經ても、乳房が張つて來ない、大抵は二三日で、張つて來るものであるから、若し張らなかつたら、張つても分泌量の少ない場合には、乳不足と思はねばならぬ。其の結果として嬰兒の腹が扁平で、膨れないのが、不足の徵候である。泣き方も烈しく、之れに乳房なり、指頭なりを遣ると、かぶり附いて吸ふのは、空腹な爲めで、愈々以つて乳不足なことが解かる。それを乳不足の故とも心附かず、其の儘引き續くときは、嬰兒は日增しに瘠せ、大小便の分量も減じ、特に

大便にあつては、黄色と暗色を帶びて、粘りを増して來るやうになる。

西洋では、母の手で育てる場合でも、母乳の外に、大抵稀釋した生牛乳又は煉乳の類を、副用する爲めに、縱令ひ乳不足でも、嬰兒を飢やすやうなことはないが、日本では近年まで、牛乳を副用することがなかつたので、動もすれば、此の乳不足の爲めに、嬰兒を瘠せらすことが多くあつた。

如上に、乳不足のことを一言したが、此の乳不足の進んだものが、卽ち斷乳で、これは全く、乳の少ないものである。斷乳は爾ふ多くはないが、乳不足の方は、少なくない。尤も乳不足にも、程度があるが、概して言ふと、現代婦人の乳が、不足して、十分でなくなつたことは、爭ふべからざる事實である。人の知る如く日本婦人は、西洋婦人と異なつて、昔から乳の多く出る種族であつたのに、近年になつて、遙かにそれが減少して、一人の小兒を育てるのに、乳が足りないといふのは、如何なる理由であるか、

甚はだ不思議に考へらるゝが、併し物の結果には、何か原因がなくてはならぬから、乳不足にも、必らず原因があるに違ひない。

其の原因には種々あつて、一概には言はれないが、其の主なるものを摘んで言ふと、大略次ぎの三種とすることが出來る。

一　現代の婦人は、昔と違つて、頭腦を使ふことの、烈しくなつたこと。

二　生活難の加はりて、不安の大となれること。

三　生活程度の、一般に高くなつたこと。

四　結婚年齡の遲くなつたこと。

五　自ら求めたるに依ること。

以上は、現代に於ける婦人の、乳量の減少した、主原因である。左に之れを說明するであらう。

腦と生殖機能との反比例

何故に、頭腦を使ふこと、烈しければ、乳が出なくなるかといふに、これは腦と、生殖機能との反比例、卽はち兩者の關係が、逆行して相伴はぬことから起こるものであつて、餘り精神を勞すると、乳が出なくなる。語を換へて之れを言へば、腦の疲勞は、泌乳作用を害するもので、それが爲めに乳が出なくなることが少なくない。乳の出なくなることを、俗に乳が上ると言ふが、これは腦を過勞すると、血液がその方へ、多く流れて行つて、乳腺に行く血が、減少する結果もあるであらうが、實際精神の過勞は乳の毒で、閨秀や、才女には、小兒が少なくある。此れ等の事實をもつて見るも、腦を使ふことの烈しくなつた現代の婦人に、乳不足の多く出つるやうになつたのは、怪しむに足らぬ。

不安の原因

右の事實は、更に次ぎの生活難と關係して、愈々婦人の不安を、買ふ原因となつた。蓋し生活難ほど、人を變化せしむることの、甚はだしきものはなく、精神的に人をば、自暴自棄に導びきて、墮落の底に陷らしめ、身體的には惡變、惡化せしめて之れを萎縮せしむること、人の知る如くである。さなきだに乳といふものは、驚愕とか、悲哀とか、或ひは憤怒とかいふ如き、精神感動に依つてすら、急に分泌の止まることがある程だから、最も大なる不安、心痛、若しくは憂愁等に、鎮されたる時の如きは、倏ちにして乳の上ることあるべきは、言ふまでもない。

乳と生活の程度

それから生活の程度が高くなつて、衣食住や、習慣の變はることも、右と同一の結果を來たすものである。

乳と食物

第一乳と關係のあるものは、食物で、魚肉の如きは、乳の爲めには、最も營養物であるが、近來は魚肉よりも、牛肉の方が、多く用ひらるゝやうになつた。これは確かに、乳の減少するに至つた原因の一である。

生活の變化

續いては住宅の變はり、衣服の變はり、交際の禮式が變つて、交際の繁

婦人の不注意若しくは不心得よりきたれる斷乳

くなつたのも、其の一と見て宜しくある。すべてが箇樣に變つて來たので婦人の體質までが變つて、遂に女の最も大切な乳にまで、惡影響を及ぼすやうになつたのである。

第五節　授乳の廢止と乳腺の萎縮

如上の乳不足、或ひは斷乳は、已むを得ざる事情より、來たものであるが、茲に婦人の不注意、又は不心得な考へから、故意に授乳を廢した結果乳不足若しくは斷乳を、來たすやうになつたものもある。これは上流社會に多く見るところであるが、必らずしも之れに限らず、中流以下勞働社會にも、近來さういふものが多くなつた。

上流社會で、故意に授乳を廢するのは、所以のあることで、全く社會的惡習慣の、致すところと謂はねばならぬ。上流社會にも、善良なる乳

社會的惡習慣

を有し、身體も健全なるもの多くあるに拘はらず、名を社交的事業、又は交際の繁忙等に籍りて、敢て授乳を廢するものがある。前者は、古來の習慣に依るものであるけれども、後者の如きは、世の風潮を逐ふて、虛榮に憧憬るゝ種類の、謂はゆる貴婦人なるものであつて、何れも廢止の理由とはならないのである。又、中流以下下流社會にも、授乳を廢するものがあつて、それぞれの理由がある。依つて之れを概括して見ると、次ぎの五種となすことが出來る。

一　單に古來の習慣にて、授乳を欲せざるもの。

二　虛榮心に憧憬れて、授乳を廢止したもの。

三　頻々授乳すると、母の容色及び齒に衰弱を來たすといふ俗說から授乳を廢止しもたの。

四　秘密に分娩したものに、授乳すると、其の秘密が顯はるゝから、

習慣に囚はれたるもの

虚榮心に驅られたもの

授乳せざるもの。

五 職業上の妨害となる爲めに、廢止したもの。

斯くの如く、種々の事情があつて、授乳を廢止した結果は、乳不足若しくは乳斷を來たすやうになつたのである。併し最後の五を除く外は、何れも授乳を廢すべき、正當の理由とはならぬ。左に之れを說明するであらう。

第一は昔時大名、長者等の、家庭に行はれたものであつて、生まれたる子は、直ちに乳母の手に渡して、養はしめたのである。蓋し授乳は、高貴人の親ら、爲すべからざるものとして、總べてを人手に委任せる、當時の習慣より、來たものである。それのみならず、此れ等貴族の慣ひとして、母子の同居を避けたのも、一層此の弊風を、增長せしめたことが、明らかである。現今の華族や、富豪の輩にも、之れに類したものが多くある。

第二は、前に述べた如く、全く虛榮心より、來たるもので、恁ふいふものは、乳兒を抱へては、交際界に出られないと、いふやうな考へをもつて居る。不條理と謂ひやうか、沒人情と謂ひやうか、吾人は其の謂ふところを知らぬ。

齒に障はるといふもの

容色の衰へるといふもの

第三は、從來人のよく言ふところのものであるけれども、生理學上より論ずれば、乳汁中の石灰質は、食物より來たるものであつて、母の齒骨に原因するに限つたものでない。けれども度々分娩するときは、何人も身體の衰弱すると共に、齒の衰ふることは、事實である。これ授乳の爲めにあらずして、妊娠と齒との關係より、來たれる結果である。之れを換言すれば、妊娠は齒を害するに依り、授乳すると否やとを問はず、妊娠すれば、齒の衰弱を免れないのである。

容貌の衰へるといふのも、右と同じ理であつて、授乳から容色が衰へるのではない。卽はち數回の分娩が、容色を衰へしむるもので、授乳をする

世間を憚るもの

職業上の關係に依るもの

と、せざるとに關したことはない。

第四は、未婚の少婦、若しくは年若き未亡人などが、私生兒を產み落した場合のものであつて、其の不倫、不德の所爲たるは、贅言を要せざるところである。

第五の、職業又は生活上の都合にて、授乳の困難なることあるは、屢々吾人の目擊するところである。例へば

一　女工（工場に勤むるもの）、

二　女事務員（會社、銀行等に奉職せる）、

三　女敎員、

等の如く、時間に束縛せられ、或ひは

一　女髮結、

二　女醫、

乳母を雇ひ入るゝ餘裕なきもの

人工養育の影響

三　產婆、

等の如く、不規則に、業務の繁忙なものにあつては、嬰兒を携帶することが出來ないから、授乳を廢止するの、已むを得ないのは、固より其のところと謂ふべきである。

斯かる場合には、牛乳等にて、人工的養育法を行ふか、否らざれば乳母を雇ひ入れ、若しくは里子に遣はすより、他に適當の途なかるべきは、これ又、世人の同情するところである。而して此の三手段中、乳母は比較的善良なる方法であるけれども、勞働に從事する程のものに、之れを雇ひ入るゝ、餘裕を有するものは、少ないであらう。

されば此れ等の、勞働社會に行はるゝ、育兒法は、第一若しくは第三の手段に、依るの外なくして、乳母は主に、中流以上の家庭に用ひらるゝのである。嬰兒の死亡の、下流社會に多いのは、人工養育の影響なりと、謂

ふ説がある。若し、生存競爭の結果、女子も將來、職業を執るに至るものとすれば、此の困難を排除する爲めに、世に獨身者の多く出づべきは、勢ひの免れざるところである。

授乳廢止より生ずる變化

次ぎに生母の、其の子に授乳することを廢止するときは、之れに依つて生ずる變化は、

身體的變化

一　身體的變化と、
二　精神的變化と、

の二種に大別することが出來る。

身體的變化は、生理的に起こるものであつて、之れに又、次ぎの三種ある。

一　乳腺の萎縮すること、
二　乳汁の分泌の止まること、

精神的變化

三　妊娠し易くなること、

精神的變化は、母子の愛情の缺亡することである。

何ういふ理で、斯かる變化が生ずるか、之れを説明しなくてはならぬ。

乳腺の萎縮

さて乳汁は、乳腺より生ずるものであつて、乳房に刺戟を與ふるときは、乳汁の分泌を促す、原因となることは、人の知る如くである、故に授乳を廢止するときは、乳腺は漸々に萎縮して、其の用を爲さないやうになるのである。

乳の上り

乳汁の出なくなること、即はち分泌の止まることを名づけて、『乳の上り』と俗に謂つて居る。此の例は、生兒の死亡した場合、若しくは富豪などの、乳母を雇ふもの等に於いて、見ることが出來る。

貧者の授乳

貧困者にして、其の子を失へば、將來を慮つて、他の子に哺乳せしむるなどして、成るべく其の授乳を廢せざるやうにするので、乳が上ること

乳上りの遺傳

授乳廢止と姙娠

なく、次回の分娩にも、よく分泌するけれども、乳母を雇ふ家庭にあつては、其の母の乳房に漲り來たる乳汁をば、徒らに搾つて之れを棄てるまでも、授乳を敢てすることがないので、乳腺は早晩退化、萎縮して、次回よりは、全く分泌の止まることがある。

此の乳上りは、獨り自己のみならず、子孫にまで遺傳して、全く斷乳の子(女子)の、生まるゝことがある。而して生母の授乳せざる又は、成育の不良なることより考へても、昔時の大名、長者などの子に、優れた者の少なかつたのは、獨り彼れ等の社會に、特有なる血族結婚の、影響のみにあらざることを、知るに足るであらう。

次ぎに授乳しなければ、姙娠し易くなることに就いては、異論を唱ふるものがあれども、乳汁と生殖作用との關係、乃はち姙娠すれば、泌乳作用の停止することより考へても、將又、之れを經驗に徴するも、年々分娩す

母子愛情の缺乏

るものは、授乳せざるものに多きこと明らかである。而して多産の害は、啻だに母體の健康を害するのみならず、延いては嬰兒に及ぼす等の事實より見て、其の弊害の如何に廣く、且つ大なるかを知ることが出來る。

授乳の廢止が、亦、母子の愛情の上に、影響することも、重大なる問題である。そも〳〵親子の愛情は、天賦自然の稟性にかゝるものであるけれども、其の情の厚薄、濃淡は、親子の狀態に依つて、必らずしも變せざるものでない。例へて言ふと、他人の子とても、幼い時から貰つて、親しく養育すると、實子の如く可愛くなつて、離すことが出來なくなるけれども、乳母の手に懸けて育てた子や、又は里子に出した子等の如きは、現在血を分けた子でありながら、之れを疎外する傾きのあるは、人の知るが如くである。

古昔の戰國時代に於いて、子は父に背き、弟は兄に抗して、互に敵對せ

るものゝ多くあつたのは、君の爲め、又は義の爲め、已むを得ざるに出づるとしても、畢竟は、父子の愛情乏しくして、相思ふことの、甚はだ薄かつたのも、其の一原因と考ふべきである。

第六節　授乳上の注意

初生兒に授乳する方法は、前既に、說べたところであるが、之れに就き更に注意すべき事項が多くあるから、玆に之れを述ぶるであらう。

一　乳房は、左右交互に用ひ、一方に偏してはならぬ。これ使用せざる方の乳房は、其の分泌を減少する、憂ひがあるからである。

二　授乳する前に、必らず乳房を消毒し、嬰兒の口中も淸潔にしなくてはならぬ。

其の之れを爲す方法は、五十倍の硼酸水を、脫脂綿に浸して之れをもつて輕く、嬰兒の口腔を拭ふのである。

三　成るべく時間を定めて、授乳すること。一定量に達したときは、乳房を離すことを忘れてはならぬ。

四　分量は、發育に應じて、漸次に增加し、決して一時に多く、授けてはならぬ。又、時に少なくしてもよくない。其の量は、次ぎに揭出せる、授乳表に基づくがよい。

五　授乳中に、嬰兒が睡眠したならば、直ちに乳房を離す習慣を附けなくてはならぬ。

よく乳房を含ませてから、睡る母親があるが、これは嚴禁しなくてはならぬ。何となれば乳房でもつて、嬰兒の鼻孔を壓迫して、之れを窒息せしむることが、多くあるからである。

それで授乳量のことであるが、之れは數度に分けて、授くべきこと、前にも言つた如くであるが、其の度數は、一日平均六七回にして、一日に與ふべき量は、大抵次ぎの如くなればよい。該量はウツフエルマン氏の授乳量を、本邦の量目に換算したものである。

日次	一日の平均授乳量
第一日	約二勺半
第二日	約七勺半
第三日	約一合
第四日	約一合三勺
第五日	約一合六勺
第六日	約一合八勺
第七日	約一合九勺
第八日	約二合一勺
第九日	約二合一勺半
第十日	約二合二勺
第三週	約二合六勺
第五週	約三合二勺半

離乳

授乳の注意として、今一つ、記憶せねばならぬことは、離乳である、離乳とは、成長して、食物を食べるやうになつた子の、哺乳を止めることで、何でもないものゝやうに思はるゝが、其の實は然うでなく、母子に取つて重大な關係がある。何となれば、乳を早く離せば、乳兒は營養不良に陷るし、遲くまで哺乳せしめて置くと、母の健康を害するからである。

離乳の時期

それで離乳には、小兒が健全で、全く乳を離れても、差し支へないといふときでなければ、離すわけに行かぬが、さりとて何時までも飲ませて置くのも、害になるから、豫めその離乳の時期を知つて置いて、其の時期が

長く授乳する害

乳は徐々にせよ

來たならば、離すことをせねばならぬ。其の時期は大抵八ヶ月、乃至九ヶ月で、十二ヶ月を超へないやうにせねばならぬ。

世間には、二つにも、三つにもなつても、尙、母が懷を開いて、乳を飲ませる者もあるが、あれは宜しくない。何となれば、永く授乳して居ると母體が衰弱するからである。又、小兒の方でも、永く哺乳するからといつて、別に强健になる理でもない。これは唯だ、乳を離したら、小兒が淋しくなるだらう、といふ習慣から來たもので、別に理由はない。實際小兒は乳に離れると、食物を多く食べるやうになるが、それは自然で、決して惡いことではないから、滋養になる食物を、適度に與へて、乳の方は離すやうにしなくはならぬ。

併し乳を離すには、急にしては不可ぬ。漸々にして、毎日五六回づゝ與へたものなら、三回とか、二回とかに減じて、仕舞ひには何時となしに、

嬰兒と乳との關係

授乳を禁

與へないやうにするがよい。

人に依つては、授乳中は姙娠しないと信じて、無理に其の子に、授乳せしむるものもある。又、一方には早く離乳しやうと、乳房に唐辛などを附けて置いて、可哀想に小兒を困らせる母親もある、孰れも良くない。

第三章　乳　母　乳

第一節　母の授乳を禁ずべき場合

嬰兒は、身體最も薄弱にして、抵抗力が極めて微弱である爲めに、少しの刺戟にも、害を受くることは、前に述べた如くである。故に乳の如く、其の常食となるものは、特に著しくして、其の質の良否は、直ちに身體に影響して、健康ともなれば、或ひは病弱ともなるのである。

それで生母であつても、其の身に惡疾のあるものや、乳房に疾患のある

ものなどの乳は、不良にして、毒を其の子に傳ふに至るので、授乳せしむる譯に行かぬ。恁ふいふ母乳は、嚴に其の授乳を止めて、之れに代はるべき乳母を撰ばなくてはならぬ。それは次ぎに讓つて、茲には先づ、其の禁止すべき母乳を擧ぐると、次ぎの如くである。

一　結核病特に肺結核に罹かれるもの。
二　脚氣の疾患あるもの。
三　癲癇、比斯的里及び其の他の精神病あるもの。
四　産褥熱に罹かれるもの。
五　急性熱性病に罹かれるもの。
六　骨軟化病に罹かれるもの。
七　乳房に疾患あるもの。例へば乳癌、乳房炎、乳腺炎、乳頭炎等の如きもの。

其の他の疾患で、すべて病氣のあるものに乳は、生母と雖も、其の授乳を禁じなくてはならぬ。又、縱令ひ著しい疾患がなくとも、體質の惡しきもの、又は遺傳性を有するものは、同樣避けなくてはならぬ。卽はち

一　結核の素質あるもの、
二　癩病の素質あるもの、
三　酒精中毒の素質あるもの、

等であつて、此れ等は堅く禁じなくてはならぬ。

尙、又、精神感動の劇烈なる場合も、一時其の授乳を禁ずる要がある。例へば激怒せるとき、或ひは甚はだしく、悲哀に打たれたるときの如くである。**アルビヌス**氏の說に依れば、或る婦人が、劇しく憤怒したときに、其の子に授乳せしめたなら、其の嬰兒は見る間に痙攣を起して、死んだといふことである。これは精神感動に依つて、乳汁中に、毒

素を生じた爲めである。

第二節　乳母の選擇及び其の資格

乳母の撰擇に於ける診査

右の事情に依つて、乳母を雇はなくてはならぬ場合には、如何なるものを選ぶべきかに就いて、必らず診査すべき點がある。卽はち

一　乳の性質及び其の分泌量、
二　健康、
三　年齢、
四　分娩の時期、
五　性格、
六　操行、
七　系統、

乳の素人鑑定法

等であつて、其の缺陷のない者は、生母の代用として、授乳を依托することが出來るけれども、然らざるものは、乳兒の健康を害し、或ひは其の惡質を傳へて、取り返しの附かぬ、大害を招くことがある。

素人で、乳の良否を鑑定するには、其の色及び比重に於いてすること、前に言つた如くである。卽はち色の白きに過ぐるものは、脂肪多く、青いのは稀薄なる證である。脂肪の過多なるものと、稀薄なるものとは、共に良乳でない。

乳母の適當なる年齢

次ぎに乳母の年齢は、二十歲から三十歲の間で、それ以前と、以後とは共に適當しない。而して初產婦よりも、經產婦の方がよいのであるが、其の分娩期は、生母の分娩より、四週乃至六週前に、分娩したものでなくてはならぬ。此の時期より早きものと、遲きものとは共に宜しくない。

母乳の生活狀態

すべては、其の乳母とすべき婦人の、生んだ小兒を一見すれば、自ら了

乳母として避くべきもの

黴毒を有するもの

解するのであるが、其の子供が死んで生存してない場合には、矢張診査を嚴にしなくてはならぬ。又、乳は、食物及び生活狀態に依つても、變ずることがあるから、成るべくは其の習慣を有して、徐々に慣れしむることが肝要である。

乳母として、絶對に避くべきものは、生母の時に於けると同じで、疾患及び惡質を有するものである。

第一 黴毒を有するもの。

黴毒には三期の階級があつて、經過を異にして居る。醫者が診れば、容易に解かるが、素人で之れを知るには、次ぎの徵候に依るがよい。

一 前額に發疹するもの、

二 鞍鼻なるもの、

三 頭部の毛髮の脫落せるもの、

肺結核に罹かり、又其の素質を有するもの

肺病體格の徵候

四 音聲の嗄斷せるもの、

此の種のものは、多くの場合に於いて、黴毒を有するものである。

第二 肺結核に罹かれるものは勿論、其の素質を有するもの。

肺結核は、極めて頑固なる症にして、之れに罹かるときは、次ぎの症狀を呈するものである。

一 最初は力のなき咳嗽を發す。

二 稍々重くなれば、咯痰をなし、其の痰に血の混ずることがある。

三 日晡熱といつて、毎夕體溫昇り、朝は降る。

四 盜汗を來たすことが多い。

五 最も重症となれば、咯血となり、衰弱甚はだしくなる。

肺結核は、薄弱なるものばかりでなく、時としては頰の紅き、一見無病なるが如きもので、却つて重き肺結核の、あることがある。其の徵候は、

乳母として撰ぶべきもの

癩病及び

肺病體格を有するにある。これは

一　麻痺胸を有するもの、（強實濶大なる、胸廓に反對せるものである。卽はち狹長、扁平、若しくは著しく狹長である。）

二　頸長く、

三　羸瘦し、

四　貧血、

五　美貌、

なる相を有するものに多くある。

乳母として撰ぶべきものは、縱令ひ肺患なく、又、麻痺胸でなくとも、すべて身體の薄弱なものは勿論、近親等に、肺患者又は其の素質を有するもの等は、絕對に避けなくてはならぬ。

第三　癩病及び其の素質を有するもの。癩病は、癩病菌と稱する、一種

の細菌に依つて起こるもので、傳染するのみならず、其の素質を遺傳するものである。故に癩病患者、又は其の素質を有するものゝ、乳を飲ませると、直接に傳染し、又は其の素質を傳ふることもある。

癩病を識別するには、次ぎの特徵に注意すれば判明る。

一　手足に異常あるもの。

二　皮膚の透明なるもの。

三　毛髮の脫落せるもの。

第四　癲癇及び其の系統を有するもの。癲癇は、腦病の一種にして、發作するときは、卒倒して人事不省となる。此の病氣は遺傳するもので、其の乳から素質の傳はることもある。だから癲癇のあるものから、乳を受くることは、危險である。

第五　精神病、及び其の系統ある精神病は、俗に發狂と稱するもので、

統を有するもの

之れに多くの種類がある。その主なるものを列擧すると、次ぎの如くである。

一　麻痺狂　多くは腦黴毒より起こり、三十五六歳から、四十五六歳の間に來たる。

二　偏執狂　意地張りの強くなつたもので、常に妄想がある。

三　**ヒステリー**　これ女子に多き症にして、患者は**ヒステリー性**の格々輕卒なる行爲をなし、虚言を爲すことが多い。殊に固有なるは、感情の激變することにして、泣くかと思へば笑ひ、笑ふかと思へば泣くが如く、感情の變じ易きことは、人の知る如くである。けれども發作しないときは、常人と異なることはないから、乳母を雇ひ入るゝときは、よく調査して、誤りのないやうにしなくてはならぬ。

酒精中毒に罹かれるもの

其の他の缺點あるもの

第六　酒精中毒に罹かれるもの。

酒精中毒とは、俗に謂はゆる酒あたりにして、酒より起こるものであるこれにも遺傳性があつて、恐るべき素質を、傳ふるものである。又、縱令ひ酒精中毒でなくとも、酒飲みの乳母は、決して賞すべきものでない。

第七　其の他の缺點あるもの。すべて疾患あるものは、乳母として不適當である。又、著しき疾患がなくとも、身體の薄弱なるもの、瘠痩せるもの等も、無論宜しくない。疾患にては、主に次ぎの如きものである。

一　脚氣　脚氣患者の乳を飲むときは、乳兒脚氣を起こして、危險に陷るものである。

二　痳疾　其の病毒が乳兒の眼に入るときは、膿漏眼となりて、失明することがある。

三　**トラホーム**　これ又、乳兒の眼に入つて、**トラホーム**となること

がある。

四　僂麻質斯、
五　黄疸、
六　心臓病、
七　乳腺炎若しくは乳癌、
八　皮膚病、
九　寄生蟲病、
十　生殖器病、
十一　貧血、
十二　痔疾、

一言にして蔽へば、疾病のあるものである。又、病氣が無くとも、體格の虚弱なものや、瘠痩せるものも、不適當であることは、前に述べた如く

である。それで乳母として、其の資格に適したるものを撰ぶことは、案外に困難である。何となれば斯くの如き婦人は、乳母として完全なるものなるからである。故に眞に乳母の資格あるものは、生母よりも必要であつて良結果を收むること、疑ひがない。

第三節　乳母の待遇

之れに依り乳母は、家庭に於ける位置を高め、其の待遇を改むる必要がある。從來は、乳母といへば、普通の下婢と、同樣に看做して、子守の役もさせれば、女中の代はりにこき使ふこともあつたが、これは大なる間違ひで、乳母には、特別の待遇を與へなくてはならぬ。何故なれば其の資格を嚴にするに於いては、自然其の待遇もよくなくては、ならぬからである。

資格なき乳母の危險

獨逸に於ける乳母の資格及び我が國に於かる狀態

併し今日でも、人に依つては、乳母に斯かる資格の必要がないと、言ふ者もあるけれども、資格の缺けた乳母は、價値のないのみならず、却つて危險であること、前に言つた如くである。乳母として依賴する以上は、飽くまでも、其の撰擇を嚴にしなくてはならぬ。

それで獨逸では、一千八百九十九年に、乳母の待遇に關する規定を、議し、同時に其の資格を定めた。此の資格は、警察に屬する醫師の、證明に依つて得られ、之れを有するものは、相當の待遇を受くべきものとした。顧みて我が國は何うかといふに、産婆、看護婦、及び保姆等に至るまで、それ〴〵資格が定められて、試驗を受けなくてはならぬことに、なつて居るに拘はらず、獨り乳母の資格を定めてないのは、何うした譯であらう。乳母や、産婆や、看護婦の如く、直接に人命を預るものではないけれども、其の責任の重いことは、遙かに保姆の上にある。

人工養育法の意義

人工養育法の盛んに行はるゝ原因

第四章　人工養育法

第一節　人工養育法を行ふ場合

人工養育法は、自然養育法に對して、與へたる語であつて、生母乳或ひは乳母乳以外の、營養品にて、嬰兒を養育する方法である。

此の人乳以外營養品には、種々あるが、その主なるものは、牛乳で近來盛んに行ふやうになつた。一體それは、何ういふ理であるかといふに、之れには種々の事情があるが、畢竟するに、經濟上の關係である。卽はち乳不足で、其の子を育てることの困難なる場合には、乳母を雇はなくてはならぬが、乳母は中流以下の家庭では、經濟上之れを許さぬに反して、人工養育法は、如何なる家庭でも、出來るから、之れを行ふやうになつたのである。今、一つの原因は、人工養育法は、西洋で盛んに行はれて居るか

其の原因の類別

人工養育法は完全なものでない

ら、之れにかぶれて、生母乳の十分なものまでが、人工養育を行ふやうになつたのである。

これに依つて、人工養育法の行はるゝ原因を、類別すると、次ぎの如くである。

一　生母乳の出ないとき、或ひは出るも其の量の不足なるとき。

二　生母の授乳を、避忌すべき事情のあるとき。

三　職業の爲めに、授乳することの困難なるとき。

四　乳母を雇ふ資力なきとき。

五　里子に出すも可哀想で、何とかして手許で養はんとするとき。

六　西洋にかぶれて、生母の授乳を厭ふとき。

ざつと右の六事情から來たもので、其の中には、事情の止むを得ないものもあるが、又、不條理なものもある。卽はち六に記してある、西洋かぶ

人工養育に對する古人の感想

れから來たものゝ如きこれである。此の種のものは、生母乳が十分であるに拘はらず、牛乳の方が、子の爲めに宜しいなどゝ、故意に母乳を廢して牛乳で育てるのである。けれども牛乳で乳兒を育てるのは、完全なものでなく、西洋で專ら牛乳を用ひるのは、大抵母の乳不足と、家庭の事情とより來たるもので、生母乳よりも、牛乳の方が、優つて居る爲めでない。勿論、牛乳でも、立派に育つは育つが、殊更に生母乳を廢して、牛乳に換へる必要はない。

我が國では古へから、みな母乳で育てゝ來たもので、牛乳で育てることは、夢にも知らなかつた。昔しさういふことをしたならば、其の子は、牛の性を引くなどゝ思ふであらう。昔の本に、或る浪人が、其の妻が、生まれた許りの一子を殘して死んだので、途方に暮れたが、飼ひ犬が、恰好產をして、數頭の子犬が、母の乳を飲んで居るのを見て、ふと考へ、其の犬

牛乳を排斥するところ

牛乳を用ゐる場合

に頼んで、嬰兒を犬の傍へ持つて行つたところが、犬は承知したといふやうに、自分の子犬を斥けて、快く授乳せしめたので、其の浪人は、淺ましいことゝは思ひながら、仕方なく斯樣にして、其の子を育て上げた。ところが其の子は、犬の性を引いて、成長の後、暗夜でも、物が見えるやうになつたといふことである。

これは小說で、そんな道理のある筈はないが、古人は之れを、眞實に信じて居たのであるから、今でも僻村に行くと、老人が頭を振つて、牛乳を排斥するところがある。

牛乳で子を育てると聞いたら、驚いたに違ひない。

そんな馬鹿げたことは、お話しにならないとして、牛乳は、母乳に優つて、最良のものとはいはれぬ。これは醫學上の說で、母乳を廢してまで、牛乳を用ゐる必要はないのである。故に牛乳を用ひるのは、餘儀なき場合に、用ふべきものとして、これから其の用法を述ぶるであらう。

注意と手段

牛乳の成分

第二節　人工養育の方法

人工養育法は、簡單で、便利なものゝやうに、世人は思つて居るが、それは大間違ひで、これほど注意と、手數とを煩はすものはない。それは自然でないものを、自然に近からしめやうとするからである。

人工養育法として、用ゐるものは牛乳であるから、先づ其の成分を知らなくてはならぬ。牛乳は人乳と同じく、固形成分は蛋白質、脂肪、無窒素物、及び鹽類であるが、其の異なるところは、牛乳は人乳に比して、

一　蛋白質の多いこと、

二　無窒素物の少なきこと、

三　鹽類の多いこと、

の三點である。今、日本産の牛乳を見るに、

	蛋白質	脂肪	無窒素物	鹽類	水
牛乳	三・五〇	四・〇〇	四・九〇	〇・七〇	八・七〇〇

で、西洋産の牛乳は、之れと少しく異なり、又、日本産牛乳でも、産地に依つて、差があるので、一定するわけに行かぬが、人乳と比較して、前記の差のあることは、何れも同一である。

然るに人工營養品をして、効果の大なるものたらしむるには、人乳に近いものでなくてはならぬから、他の獸乳でも、人乳に近い成分を有するものは、牛乳同樣に、使用することが出來る。それは如何なる獸乳であるかといふに、次ぎの種類がある。

種類	蛋白質	脂肪	無窒素物	鹽類	水
馬乳	二・〇五	一・一七	五・七〇	〇・三七	九〇・七一
驢馬乳	二・〇一	一・三九	六・二五	〇・三一	九〇・〇四
山羊乳	三・六九	四・〇九	四・四五	〇・八六	八六・九一

此の外に、二種の牛乳を凝固した製品がある。その一は牛酪で、他の一は、牛乳を乾製したところの、乾酪である。

	蛋白質	脂肪	無窒素物	鹽類
牛酪	〇・七〇	八四・四〇	—	一・〇〇
乾酪	六・六九	四・〇九	四・四五	〇・八六

右の事實に依れば、人工養育として、人乳に近いものは、驢馬乳で、驢馬乳は、嬰兒の營養品として、牛乳の上に出づるけれども、其の供給の少なくして、實用に適しない爲に、廣く之れを使用するところまで行かぬ。これには古から、一般に牛乳を用ひ來たつた、習慣もある。

それはさて牛乳をもつて、乳兒を育てるには、周到なる注意と、複雜な

る手數とを要するものなることは、前に言つた如くで、大人では之れを煮沸さへすれば、その儘飲んで、差し支へないが、乳兒は爾ういふ譯に行かぬ。其の消毒して牛乳に、一定度の水を割つて、之れを薄くしなくてはならぬ。卽はち

一　稀釋法（水を混ずること）

二　消毒法（煮沸すること）

とであつて、前者は牛乳の成分を、成るべく人乳に近からしむる爲めに、後者は病菌を絕滅する爲めに、行ふのである。

乳兒に飲ませる牛乳は、何故稀釋しなくてはならぬかといふに、純牛乳では、人乳より濃厚で、嬰兒に適しないから、成るべく之れに近からしむべく、薄くするのである。それは通常水を加ふることに依つて、仕遂げらるゝけれども、其の水の分量は、乳兒の經過體質及び强弱等に依つて、

加減しなくてはならぬか、普通は先づ次ぎの標準に依るとよいのである。

生後の經過	牛乳	水
第一週まで	一	四
第二週後	一	三
第二月後	一	三
第三月後	一	三
第四月後	一	二
第五月後	二	一
第六月後	二	一
第七月後	三	一
第八月後	四	一

純牛乳

斯の如く純牛乳を與へる時期は、大抵八月以後であるが、時としては七月頃から純牛乳にしても、よいことがある。それは强健で、發達の佳良な

稀釋に用ゐる水

ものに限り、虚弱なものは、九月後からでなければ、純牛乳にせられぬこともある。

茲で注意しなくてはならぬことがある。それは稀釋に用ゐる水で、必らず一旦煮沸したものでなくてはならぬ。生水を其の儘に混ずると、乳兒の下痢を起こしたり、或ひは胃腸の病ひを發したりすることもある。

加糖法

斯くの如く牛乳に、水を混和すると、牛乳が薄くなつて、乳糖及び脂肪が、不足になるから、それを補はなくてはならぬ。先づ乳糖の方から言ふと之れを加糖法と名づけて、牛乳百グラムに就き、次ぎの割合ひで、上等の砂糖を混和するのである。

白糖ならば　三乃至四グラム

乳糖ならば　四乃至五グラム

滋養糖ならば　六乃至八グラム

牛乳代用品

コンデンスミルク

此の滋養糖なるものは、**ソツクスレー**氏の製劑に係かれるもので、普通に**ソツクスレー**氏の滋養糖といつて居る。すべて糖は、乳兒の體内に入つて、特別の効果があるでないが、便秘を防ぐに必要のものである。

又、稀釋に依つて、減少した脂肪も、補はなくてはならぬ。これには其の脂肪を補ふ目的にて、製した牛乳代用品がある。卽はち次ぎの數種で、何れを用ひてもよい。

一　**バツクハウス**氏小兒乳。

二　**ビーデルト**氏牛乳混和乳。

三　**ゲトトネル**氏脂肪。

四　**コンデンスミルク**。

コンデンスミルク卽はち煉乳は、普通に多く用ゐらるゝけれども、糖分が多過ぎて、乳兒の胃腸を害する恐れがあるから、之れを用ゐるときは、

牛乳のときのやうに、薄くしなくてはならぬ。其の稀釋は、次ぎの標準に從ふとよい。

生後の月	コンデンスミルク	水
一週	一	二五
一週後	一	二三
二ケ月	一	二一
三ケ月乃至四ケ月	一	二〇
五ケ月乃至六ケ月	一	一八
七ケ月乃至八ケ月	一	一六
九ケ月乃至十ケ月	一	一四
十一ケ月乃至十二ケ月	一	一一
一年以上	一	一〇—七

便宜の爲めに、生乳と、コンデンスミルクと、比較すると、次ぎの如くである。

	生乳のときは	コンデンスミルクのときは
一週	四倍	二十五倍
一ケ月	三倍	二十二倍
二ケ月	三倍	二十一倍
三ケ月	二倍	二十倍
四ケ月	一倍	同
五ケ月	一倍の二分一	十八倍
六ケ月	一倍の三分一	同
七ケ月	一倍の四分一	十六倍
八ケ月以後	純生乳	同
九ケ月乃至十ケ月		十四倍
十一ケ月乃至十二ケ月		十一倍

煉乳を稀釋する水

稀釋と大便

人乳と食物との關係

牛乳の消毒

一年以上　十倍乃至七倍

右**コンデンスミルク**を稀釋する水も、牛乳と同じく、一旦煮沸したものでなくてはならぬ。

生牛乳でも、**コンデンスミルク**でも、其の稀釋は、乳兒の大便に依つて加減しなくてはならぬ。即はち大便の硬いときには、水を多くして薄く爲し、之れに反して下痢をするときには、水を減じて、濃くしなくてはならぬ。要するに乳兒の便は、乳に依つて變化するものであるから、注意しなくてはならぬ。

人乳でも、乳兒の便の、硬くなつたり、下痢したりすることのあるのは母の食物に關係するのである。

次ぎに消毒法とは、生牛乳に、一定の高溫度を與へて、其の中に生存する細菌を、絶滅することを謂ふのである。これ牛は、人類と同じく、結核

病に罹かゝり易く、然るときは其の乳に、結核菌の含有せらるゝことが、あるからである。生の牛乳を飲ませて、結核に罹かつた乳兒の例もあるから、生の牛乳は、必らず消毒しなくてはならぬ。

牛乳を消毒するには、種々の法あるが、單に牛乳を煮沸するときは、其の質を變ずる失がある。即はち

一　蛋白質の凝固すること、

二　鹽類の遊離すること、

三　酸酵素及び抗菌素の、分解すること、

等であつて、牛乳の効力を、減少するに依り、牛乳消毒器を用ひなくてはならぬ。此の消毒器にも又、種々あるが、普通に用ひらるゝものは、**ソツクスレー**氏消毒器と稱するもので、之れを購ふことの出來ないものは、牛乳饂（牛乳配達が、牛乳を込めて持つて來る饂）を、その儘、饂なり、鐵瓶

牛乳を用ひる手數と不便

なりの中へ入れて、煮沸するのである。然るときは、牛乳が變質することなしに、完全に消毒せらるゝものである。

牛乳を用ひるには、斯樣な手數が係かつて、不便である。人乳なれば、時間を定めて、其の都度與へさへすれば、それでよいのであるが、牛乳や**コンデンスミルク**になると、消毒したり、稀釋したりしなくてはならぬ上に、暑いときには、腐敗を防がなくてはならぬから、一時に多く拵らへて置く譯に行かぬ。又、寒いときには、直ぐに腐敗する憂ひがない代はりに餘り冷たくないやうに溫める必要がある。それで夜にても、火を絶やす譯に行かぬ。恁ういふことは、實際子を持つて、之れを育てゝ見なければ、何の位手の係かるかといふことは、解かるものでない。

乳兒の胃の容積

序でに、乳兒の胃の容積を示すであらう。これは乳を飲ませるときに、必要であるから、知つて置かなければならぬ。

胃の大小

生後	胃の容積（グムラ）
第一週	四六
第二週	七二
第四週	八〇
第二ヶ月	一四〇
滿一年	四〇〇

右は平均した胃の容積で、中にはこれより大きいものと、小さいものとあるから、其の大きな胃を有するものは、多く飲み、小さい胃のものは、少なく飲むといふことになる。其の大小は、大抵乳の飲みやうで解かるのである。それで一日に與へる度數と、其の量とを掲ぐると、次ぎの如くなる。

生後	一日に與へる度數	一回の分量（グラム）	一日の分量（グラム）
生後の月			
生後三日	八回	五〇	四〇〇

一週間	八回	七五	六〇〇
二週間乃至三週間	八回	八五	六八〇
四週間乃至五週間	八回	一〇〇	八〇〇
六週間乃至十二週間	七回	一二五	八七五
四ケ月	七回	一二五	八七五
五ケ月	六回	一五〇	九〇〇
六ケ月乃至七ケ月	六回	一七五	一〇五〇
八ケ月乃至十二ケ月	六回	二〇〇	一二〇〇

一日に與へる度數といつたのは、勿論晝夜のことであるが、夜分は、回數を多くしてはならぬ。精々二回位に止めて、晝の方で多くする癖をつけなくてはならぬ。例へば一日八回ならば、六回までは晝にして、あと二回は夜に與へるといふやうにすると、乳兒はよく睡つて、健全に育つものである。嬰兒の睡眠のことは、次ぎの章で治す。

それから牛乳でも、人乳でも、六ヶ月以後に至れば、副食物として、次ぎの食物を與へることが必要である。

一　おもゆ（粥の上汁）。

二　葛湯少し白糖を混じたもの。

三　粥。

四　鷄卵半熟としたもの。

五　ソップ。

漸々に之に慣るゝやうになつたならば、米飯を與へて、乳の方は、全く離すことをしなくてはならぬ。これは前にも述べた如く、永く授乳をして居ると、母の健康を損するからである。

それから間食物として、乳兒に與へて差し支へのない菓子は、

一　カステーラ、

二　上等の麭麵。
三　羊羹。

等であるが、多く與へてはならぬ。

第三節　牛乳と人乳との比較

兩者の比較

小兒の成長に關することは、次ぎに讓つて、茲に牛乳と人乳とを、比較して見るであらう。

人工的養育の不適なる理由

前にも言へる如く、牛乳にしろ、**コンデンスミルク**にしろ、すべて人工的の養育法は、自然的の養育法に比して、結果の宜しくないといふのは、其の營養分が、不足して居る爲めでなく、其の成分の嬰兒に、適しない爲めである。牛乳は食物としては、最良のものであるけれども、羸弱なる乳兒を養ふには、人乳に比して、遙かに劣つて居る。牛乳を稀釋するのも、畢竟、其の成分を、人乳に近よらしむる爲めなることは、前に述べた如くである。

養育法と嬰兒の死亡との關係

醫學上の說に依ると、牛乳で育てた小兒は、母乳で養つた小兒よりも其の死亡數が、著しく多いのみならず、成長した後までも、體格が弱くして、徵兵檢査に、合格しない者が、多いといふことである。獨逸の有名な產科醫、**ヘガール**氏の調査した、統計に依ると、一千八百七十八年に、伯林で死亡した嬰兒の總數は、一萬三千百五十三人で、其の中牛乳で、養育された小兒の死亡數は、總數の殆んど過半に達して居る。その內容は、次ぎの如くである。

養育の方法　　嬰兒の死亡數

牛乳にて養はれたるもの、　五・五六二

混合營養品（人乳牛乳）にて養はれたるもの、　二・八二〇

其の百分比例

生母の乳にて養はれたるもの、
乳母の乳にて養はれたるもの、
不明なるもの、

それで**ヘガール**氏は、其の死亡總數から、最後の不明數を引き去つて、殘り一萬二千二十三人につき、百分比例を取つたところが、次ぎの如くであつた。

養育法	死亡の百分比例
牛乳養育、	四九・六〇
混合養育、	二五・一〇
生母乳養育、	二四・二〇
乳母乳養育、	〇・九八

乳母乳の

此の表に依ると、成績の最も良いものは、乳母乳であつて、最も惡いものは、牛乳である。乳母乳の良いといふことは、當然で、これは乳母といふものは、健全な婦人で、理想的のものであるからである。

優れたる理由

第五章　嬰兒の成長、睡眠及び排泄

第一節　嬰兒の成長

初生兒と乳兒の區別

さて小兒には、成長に依つて、種々の名がある。先づ生まれた許りのときは、之れを初生兒といひ、臍帶斷端の落つるまで、此の名を用ひて居るが、それから九ヶ月までは、乳兒といふのである。

成長と健康との關係

成長とは、體量の次第に增加して行くことで、其の結果として體重は增加し、身長は伸びて行くのである。これはみは食物、卽はち乳から來るところの、滋養分に依るもので、嬰兒の健康と、不健康とは、其の成長の如何に依つて、トすることが出來る。

初生兒の減量する理由

小兒の生まれたときは、體重は大抵七百五十匁から、八百匁位までの間で、身長は一尺五寸から、一尺六寸位であるが、不思議なことには、二三日經つと、以前の目方より減つて、輕くなるのである。これは何ういふ理由であるかといふに初生の際は、胎糞や、尿が溜まつて居るのと、身體が少し腫れて居るとの、事情から重かつたのが、二三日の中に、其の排泄物が排泄して仕まひ、又、腫れが引き去るので、重さが減つて行くやうに思はるゝが、眞に減るのではない。時としては其の腫れが甚はだしくして丸々と太つたやうに見え、て居る中に、瘠せて仕まうといふやうなこともあれば、頭の恰好が惡くて、心配して居ると、それも二三日の中に、癒つて、常態に復するといふこともある。

成長の度

斯樣にして常態に復してから、日增しに重くなり、身長の伸びて行くのが、眞の成長で、其の度は、著しくある。今、體重に就いて、其の精密なる割合を示すと、次ぎの如くである。

時期	毎期初日の體重(匁)
第一日乃至第二日	八六五
第三日乃至第七日	八二七
第八日乃至第三十日	八六五
第二月	一・〇六四
第三月	一・二五〇
第四月	一・四二三
第五月	一・五八三
第六月	一・七二九
第七月	一・八六二
第八月	一・九八二

此の月に至つて、最初の二倍となる。

第九月　二・〇八八
第十月　二・一八一
第十一月　二・二六一
第十二月　二・三二八

此の月に至つて、體重は最初の三倍となり、身長は二尺三寸餘となる。

諸器官の發達

次ぎは五官の發達にて、其の最も早く發達するものは味官である。次ぎは觸官にして、視官及び聽官は、割合に遲くなる。

味官

味官卽はち舌の、食味に對する感覺は、頗る早くして、胎生七ケ月の頃より、既に具つて居るのは、本能として、食慾を滿たす爲めである。

觸官

初生兒の口に、初めて乳房を當てがへば、自ら吸吮して、乳を飲むことを知つて居るのは、全く本能に依るものであつて、其の乳房を吸ふのは、一つは口唇（觸覺）の、補助に依るのである。故に初生兒の觸覺、特に唇は、特殊の感覺を司どるものと謂ふべく、他の皮膚の感覺は、唇に比すれば、其の發達が遲くある。

視官

初生兒の視官卽はち眼は、盲目で生後、八日に至るまでは、明暗を辯ずることが出來ぬ。其の差明を覺ゆるのは、生後二十一日頃からであるけれども近視的である。其の一般に色を辯ずるのは、生後一年四ケ月の頃からである。

聽官

それから耳は、初生のときは、全く聾であるが、生後二十一日頃に至れば、聽官が稍々完備し、其の全く音響を聽くやうになるのは、生後三ケ月頃からである。

運動器官

次ぎに運動器官で、早く運動するものは、手で、其の初めて把握を試むるのは、生後四ケ月である。起座を試むるのは、生後六ケ月で、歩行は生

後十一ヶ月である。此の月に至つて、尙、歩行の出來ないものは、發育不良である。

第二節　嬰兒の睡眠、其の抱き方及び運動

健康と睡眠

嬰兒を、健全に育てるには、十分に睡眠せしむることが、必要である。睡眠は初生兒の特徴で、初生兒ほどよく眠るものはない。俗に百日の眠り兒と稱するのはこれで、盛んに眠るものであるから、眠るだけ眠らせるがよい。

嬰兒を眠らせる必要及びその利益

健康な嬰兒は、乳さへ飲めば、直ぐ眠るもので、特に初生の際は、晝夜の別はないから、其の積りで眠らせなくてはならぬ。此の睡眠といふことは、嬰兒に取つて、極めて必要で、次ぎの如き利益がある。卽はち

一　腦の發育をよくすること、

不眠の原因

眠らない兒の異常

二　胃の消化を促すこと、

三　排泄をよくすること、

等であつて、十分に睡眠しないと、腦を害し、胃を惡くすることは、小兒を持つた人の、知るところである。

斯樣によく眠るのが、嬰兒の性質であるから、若し眠らないで、泣くときには、それは何所かに異常があるに違ひない。例へば

一　身體の異和（腹痛或ひは頭痛等の如き）。

二　哺乳の不十分（空腹）。

三　寢具の溫度不適當（寒くても眠られぬし、暖過ぎても同樣の結果を來たすものである）。

四　排泄物の刺戟（大便或ひは尿が、襁褓を汚して、冷たくなると、寢られなくなる）。

嬰兒を眠らさゞる害

嬰兒を動かす害

五 蚤其の他蟲類の刺戟(夏には、蚤の附くことが多くある)。等の如きであるから、眠られないときには、此れ等の原因の、何れかにあるものと看做して、よく身體を檢べて、遣らなければならぬ。さうして其の原因を取り除けば、嬰兒は直ちに眠るものである。

斯樣に睡眠は、嬰兒に必要であるから、乳を飲ませたならば、靜かに床に寢かさなくてはならぬ。然るに世間には、哺乳後直ぐに眠ると、消化が良くないといつて、大人が食後、運動するやうに、授乳後嬰兒を抱いたり搖つたりして、寢せないものがある。これは實に誤つた考へで、醫學上から見ると、亂暴と謂はねばならぬ。嬰兒は大人と違つて、胃の位置が異なり、其の働きも弱くなるから、大人と同樣にすることは出來ぬ。

それで授乳後、嬰兒を動かすと、胃及び腦を惡くして、次ぎの如き、危害を釀すことが多くあるから、注意しなくてはならぬ。

嬰兒の嘔き易き譯

嬰兒の睡眠時間

嬰兒を寢かす仕方

一 乳を嘔く癖をつけること。

二 氣むづかしくなること。

三 運動が激しければ、腦震盪を起こして危險に陷ることがある、

嬰兒の嘔吐し易いのは、其の胃が直立の位置にある爲めである。身體を動かすと、嘔くのは此の故である。

それで嬰兒は、何程睡眠すればよいかといふに、これは年齡に依つて一樣でないが、初生兒は哺乳時と、襁褓を取り換へるときとの外は、悉く眠らして宜い。一ケ月も經過すると、身體が發達して來るから、隨つて睡眠時間が減少し、一年の終はりには、平均十六時間位となる。

それから嬰兒を、寢かすときは、成るべく側臥といつて、體の一側卽ち左側なり、右側なりを、下にして臥せしむるのがよい。仰臥(仰向きに臥すこと)せしむると、嬰兒が若し乳を吐いたとき、それが氣管、或ひは

抱き或ひは負ふにもよい時期

に鼻腔に入つて、咳嗽を發し、それが、爲めに病氣を惹き起こすことがある。側臥すると、乳を吐いても、それが口外に流れ出て、氣管又は鼻腔に入ることがないから、側臥せしめなくてはならぬ。併し時々其の位置を、取り換へなければ、嬰兒の頭が變形して、畸形になることがある。

斯樣にして寢かすのは、生後五六ヶ月の間で、小兒が自ら體を起こすやうにならば、之れを抱き、或ひは負ふても良いが、早くから抱いたり、負ふたりするのは、甚はだよくない。

又、嬰兒を寢かすに、東北地方に行はるゝやうな、藁籠の類に入れて、寢かすのはよくない。此の藁籠には、種々あるが、全部藁で出來て居るものと、外部は桶で、內部に藁を敷いたものとの、二種に大別することが出來る。隨つて其の名稱も種々である。例へば

岩手、青森地方、及び北海道にては、いづこと呼び、全部藁にて造る。

藁籠の害

秋田地方にては、外部は桶にて、內部は藁より成り、名稱は前と同じ。越後にては、なぐら、

上方にては、ふご、

と呼ぶが如きで、其の害になるといふ理由は、次ぎの五點にある。

一　常に濕つて居ること。

二　不潔になり易いこと。

三　斜めに寢かすけれども、足が前に支へて、殆んど直立と同じ形になるから、脊柱の彎曲することがある。

四　身體が少しも動けないやうに固く束縛せらるゝこと。

五　夏には、蒸熱して、不快に堪へざること。

此の藁籠は、本來は寒國にあつて、寒氣を防ぐ爲めに、出來たものであるから、嚴寒の候にはよいとしても、前述の樣な缺點があるので、決して

抱き方

嬰兒の爲めによいものでないから、恁ういふものを使用する地方では之れを廢止して、平寢をさせる習慣をつけなくてはならぬ。

又、嬰兒の抱き方も、心得て置かねばならぬ。これは右腕、或ひは左腕と、位置を換へて、一方に偏しないやうにしなくてはならぬ。卽はち右に抱いたら、次ぎは左に移し、その次ぎは右といふやうに、交代しないと、嬰兒の身體が、一方に曲ることがある。何にしろ嬰兒の骨骼が、極めて薄弱で、何うとも變ずるものであるから、萬事に就いて、十分に注意せねばならぬ。

負ふこと

それから嬰兒を、背に負ふことである。これは日本の習慣で、よいものでないか、併し次ぎの各項を除けば、さほど害にならぬ。卽はち

一　紐をもつて、嬰兒の胴及び手足を、緊縛すること、

二　紐を小兒の腋下に廻はして、固く結びつけること、

三　長時間負ふこと、

等で、斯樣にするとよくないから、短時間緩つたりと、負ふことにすればよい。それにしても初生兒の際は、絶對に負ふことはならぬ。

睡眠せしむる方法

睡眠に就いて、今、一つ注意すべきことがある。それは何うしたならば小兒がよく寢つくかといふことである。これは前に述べた、小兒のむづかるときに、其の身體を檢べて、眠らない原因を去ることの外で、之れに次ぎの方法がある。

輕く動搖すること の必要

第一は、極めて輕く動搖することで、之れに又種々ある。卽はち

一　嬰兒の背部を輕く打つこと、

二　嬰兒を背に負ふて、輕く體をゆさぶること、

三　乳母車にて、輕く引くこと、

等で、東北の藁籠を用ひるところにては、籠の底に、丸棒を入れて籠を

強き動搖は害

動かしつゝ、嬰兒を眠らして居る。又、ふごを用ひるところでは、之れに綱をつけて空中に釣り、輕く之れを動かして、眠らすところもある。極めて輕く動かすときは、嬰兒は快い心持になつて、自ら眠りにつくものであるけれども、激しく動すと、腦に震盪を起こして、却つて腦を害することがある。又、乳母車を用ひるならば、家の中で、疊の上を輕く引く位に止め、決して戸外に出てはならぬ。

斯樣に嬰兒を眠らせるには、體を搖るのが適當であるけれども、それは靜かにして、強くしてはならぬといふことに、吳々も注意しなくてはならぬ。人に依つては、泣く子を、強く振り動かしたり、或ひは肩や、背を打つたりして、隨分殘酷に、其の子を取り扱ふ母親もあるが、これは大なる了見違ひで、嬰兒は強く搖つたり、叩いたりして、眠るものでない。

第二は、子守唄で、嬰兒を眠らせるには、最も適當である。これは何う

いふ理であるかといふに、善良なる子守唄は、嬰兒の腦を靜めて、睡眠を催さしむるからである。これは嬰兒ばかりでなく、大人でも然うであるが、子守唄は音樂的のものであるから、上手に歌ふとついうつとりとなるものである。

それで子守唄は、昔から多く用ひられて、何所の國にでも、子守唄の無いところはないが、併し嬰兒に聞かせて、其の單純な腦を、休ませるに必要な子守唄は、之れを撰び、且つ歌ひ方をよくしなければならぬ、之れを換言すれば、子守唄の種類は、極めて多くあるが、其の中から適當なものを撰んで、節面白く歌ふのである。

子守唄の歌ひ方に就いて、或る人は、次ぎの如く說明した。

一　高低强弱の順序に注意して、低い聲の後には、必らず高い聲、弱い聲の後には、必らず强い聲で歌はなくてはならぬ。さうして唄

の初めと、終はりには、低い聲か。若しくは弱い聲を用ひるやうにせねばならぬ。

二　聲を靜かに出して、それがなだらかに、搖れるやうにしなくてはならぬ。

三　嬰兒が、泣き喚いて居るときには、初め勉めて、強い高い聲を出だし、嬰兒の泣き靜まるに從つて、低い聲で歌はなければならぬ。併し何うしても、泣き止まないときは、急調子で唱ふのと、緩かに唱ふのと、交る〳〵用ひるやうにしなければならぬ。

四　聲を低くして、唱ふ方がよいか、或ひは高くした方がよいかは、其の場合に依つて、自然に解かつて來るものである。感の強い嬰兒には、低い聲で唱ひ、普通の小兒には、少し調子を高くする方がよい。

第三節　嬰兒の排泄

排泄とは、營養にならない物質、卽はち老廢物を、體內から排出することで、健康と最も大なる關係がある。之れを換言すれば、小兒が健康であるか、不健康であるか、或ひは乳が適して居るか、適して居らぬか等の狀態を知るには、排泄物に注意して、之れを檢しなくてはならぬ。斯くの如く排泄物は、嬰兒の健康の標準となるものであるから、母親たるものは、一日も等閑に附すべからざるものである。

此の排泄物は、卽はち大便と、尿とであつて、之れに就き、其の注意すべき事項は、

一　便及び尿の色、

二　便及び尿の分量、

胎便又は胎糞

嬰兒の健康と不健康

三　便の硬軟、

等で、それが常と異なるときは、身體に異常のある證據である。

初生兒の、最初に排泄する大便を、胎便又は胎糞といひ、俗に之れを、にばゝと名づけて居る。これは胎生中に生じたもので、腸の中に溜つて居たのが、產まれてから、排泄するので、其の色は黑く、綠色を帶びて居る。何にしろ長い間、母の胎中で、養はれて居たのであるから、胎便の量が可なり多く、毎日三回つゝ排便して、三日目に至り、初めて黃色の便に變ずるのである。

初生兒が三四日過ぐると、却つて其の目方の減ずるのは、恁ういふ排泄物が、多く出る爲めであることは、前に言つた如くである。恁ういふ狀態で、行く嬰兒は、健康であるが、若し三日過ぎても、體重が減じなかつたり、胎便がよく出なかつたりするのは、體內に異常がある證であるから、

排尿

襁褓の取り換へ

速に專門醫に診て貰はなくてはならぬ。

それから尿の方は、何うかといふに、其の度數は一定してないが、數多く排尿するほど、健康である。それで若し、排尿が少なくなつて、全身に腫れ氣(浮腫)でも、來るやうであつたならば、早速醫者にかけなくてはならぬ。これは腎臟又は、心臟に病氣のある證で、之れを放棄して置いたり或ひは醫者に懸かつても、手後れすると、取り返しの附かぬことになる。實に恐るべきものであるから、呉れ〴〵も注意しなくてはらぬ。

嬰兒は、大便も小便も、みな襁褓の上にするものであるから、襁褓は時間を定めて、屢々取り換へて遣らなくてはならぬ。襁褓が汚れると、氣持が惡くなるから、よく寢就けなかつたり、泣いたりして、氣難しくなることは、人の知る如くである。此の泣くことに就いては、次章に詳述する積りである。

便器を使用する利益

それから嬰兒が、漸々成長して、力が附いたならば、(生後三ヶ月以後、)時間を計つて、便器で用を辨ぜしむる。習慣を附けるがよい。これは嬰兒の兩足を、後から、膝關節にかけて、抱き上ぐるので、襁褓を汚すことがない、併し抱きやうが惡かつたり、餘り長く抱いたりすると、宜しくないから、注意しなくてはならぬ。

泣くことは嬰兒の特徴

第六章　嬰兒の泣き方

第一節　嬰兒の泣き方と健康との關係及び其の種類

小兒特に嬰兒は、よく泣くものであつて、これは睡眠と共に、嬰兒の二大特徴といふべきである。此の泣くといふことは、嬰兒に取つて、何か異常つたことがある爲めで、泣くのは良くないやうに思はるゝが、必らずしも然うでなく、泣く爲めに、却つて健康を利することがある。それは別段に、大した異常のあるでなく、唯だ無意味に、泣くやうなときには、身體が丈夫になるから、嬰兒の泣くのは、一の運動と看做さねばならぬ。

靜的運動

醫學上では、恁ういふ運動、卽はち嬰兒の泣くことを、靜的運動と名づけて、次ぎの如く、健康と關係のあることが、謂はれて居る。卽はち

一　肺を強くすること、
二　消化を助くること、
三　血液の循環をよくすること、
四　排泄機能を促すこと、

等であつて、これは泣くことに依つて、促進せらるゝものである。

泣かない嬰兒は弱くなる

然るに、醫學上の知識の乏しい人は、嬰兒の泣くのは、如何にも可哀想で、聞いて居られないから、少しでも泣き出すと、それ泣いたといつて、

違和或は病氣の爲めに泣くもの

直ぐに乳を飲ませたり、體をゆすつたりして、泣かさない工合をするが、それは餘り念が入つて、却つて嬰兒を損ねるのである。何となれば嬰兒の肺は、泣く度毎に、深呼吸となつて、漸々に發達し、胃及び血行も、それに依つて、盛んになるのであるが、泣かないと、其の作用が止むから、嬰兒を泣かさないやうに育てるのは、取りも直さず、念を入れて、弱く育てると同じである。

それで嬰兒は、度々少し位、泣かして置く方がよいといつて、幾ら泣いても、一向構はずに、泣かして置くのも、極端で良くない。嬰兒は泣く位泣けば、あとは疲れて、眠つて仕まうものであるけれども、それは場合に依るもので、別段身體に障害がなくして、泣く分には、放棄して置いてもよいやうなものゝ、若しも病氣で、苦痛の爲めに、泣くのであつたら何うする。特に膿膜炎で泣くものを、其の儘にして置いたならば、病勢が愈々

泣くのを放棄つて置くのは惡い

泣き方の方法

進んで、危險に陷ることは、言はなくとも、解つて居ることであるから、注意しなくてはならぬ。

之れを要するに。嬰兒の泣き方は、大切なもので身體に違和があり、或ひは病氣の爲めに、泣くものまでも、放棄つて置く譯に行かぬ。特に夜泣きといつて、夜に泣く癖のある嬰兒の如きは、之れを癒さなくてはならぬ。

夜泣きのことは、後に譲つて、茲に先づ嬰兒の泣き方を記さんに、之れに種々ある。例へば

一　力のない泣き方をするもの、

二　力のある泣き方で、時々間を置いて泣くもの、

三　火が附いたやうに、急に泣くもの、

四　けたゝましく長く泣くもの、

五　酸漿を鳴らすときのやうな聲で、泣くもの、

泣きの原因

六 啜り泣きをするもの、

七 泣いては止み、止んでは泣くといふやうに、斷續的の泣き方をするもの、

等の類で、多くの場合、何か原因があつて、泣くに違ひない。

第二節　泣き方の原因

嬰兒の泣くのは、自然的要求と謂ふてよい。勿論此の要求は、成長した小兒のやうに、心に思つて泣くのではないが、何が不平があるか、或ひは欲することがあるか、或ひは訴へることがあるかして、それが自然に泣きとなつて、現はるゝのである。そこで泣き方に依つて、其の原因を知り、之れに依つて、嬰兒の不快、要求、或ひは疾病等を、探ぐることが出來るのであるから、嬰兒の泣き方に就いては、常に注意して、之れを研究する

其の設明

力の無い泣き方

力のある泣き方で時々間歇するもの

ことが、小兒を育てる上に於いて必要なることを、忘れてはならぬ。

そこで前に示した泣き方に就いて、茲に一々説明を試むるであらう。

第一。力の無い泣き方をするときは、嬰兒は頻りに首を動かしたり、眉間に皺を寄せたりして、泣くことが多い。これは蚤に食はれるか、着物又は枕などに、刺或ひは針のやうなものがあるといふやうに、主に外部の刺激の爲めに、泣くのである。又、腋の下や、股などが糜爛して、痛むときにも、恁ういふ泣き方をするものもある。それで恁ういふ泣き方をしたならば、早速着物や、身體を檢めて見るがよい。

第二。力のある泣き方で、時々間を置ものは、大抵空腹のときである。恁ふいふ場合に、乳房を嬰兒の口に持つて行くと、かぶり附くやうにして吸ふものである。これは空腹になつて居るのであるから、十分に飲ませるがよい。世間には嬰兒が泣くと、其の口に護謨乳嘴を入れて、吸はせる者

火が附いたやうに急に泣くもの

があるが、これは餘程注意しなければならぬ。嬰兒は空腹になつて居るときは、護謨乳嘴でも、指でも構はず、一時は吸ふので、其の間は泣きが止まるけれども、不潔な護謨乳嘴であると、それから恐るべき細菌が、嬰兒の口中に入つて、疾患を釀すことがある。假令ひ爾ういふことがないにしても、全く空腹になつて居るところへ、護謨乳嘴を與へたところで、何の役に立たう。之れが爲に、嬰兒は却つて、強く泣き出すものであるから、空腹で泣く子には、嘯しごとをしないで、母の乳なり、又は牛乳なりを例日の如くに與へなくてはならぬ。

第三。 火が附いたやうに、急に泣くものは、大抵、腹痛か、或ひはその他に、疼痛がある爲めである。此のときには、泣きながら、手を握つたり開いたり、或ひは足を伸ばしたり、縮めたりして、乳を與へても、容易に吸ひ着かないものである。又、咽喉或ひは氣管に、異常があつて、泣くも

けたゝましく長泣きをするもの

酸漿を鳴らすときのやうな泣き方をするもの

啜り泣きをするもの

のは、其の泣くときに、咳嗽が出るから、推測することが出來る。

第四。 けたゝましく、長泣をするものは、腦に異常がある。多分は頭痛で、手を握り、足を縮めるものである。これは腦膜炎の原因となることがあるから、注意しなくてはならぬ。

第五。 酸漿を鳴らすときの樣な、泣き方をするもの。これは恐るべき腦膜炎の徵候である。嬰兒の腦膜炎を、俗にほうづき蟲と言つて居るのは、舌が收縮して、恰も酸漿を鳴らすやうに、響くからである。人の體中に、そんな蟲があつて、小兒を苦しめるのではなくして、腦膜炎の爲である。すべて嬰兒が、腦膜炎に罹かると、みなさういふ泣き方をするから、直ぐに解かる。此の時には直ぐに醫者に診て貰はなければならぬ。

第六。 啜り泣きをするものは、大した障害でなく、多分は襁褓が汚れ、或ひは汗の爲めに、着物が濕つて、不快になつたときであらう。此の場合

斷續的泣き方をするもの

には、襁褓を取り換へ、又、着物を着換へて遣れば、心地よげに、眠るものである。

最後の、斷續的泣き方をするものには、腦に原因するものが多い。特に時間を定めて、泣くもので、腦から來たがるものには、恁ういふ泣き方をするものが多い。危險なるものであるから、これ又、速に醫師に診て貰はなくてはならぬ。

夜泣き

以上は、普通嬰兒の、泣く原因の大要であるが、此の外に大切なものは夜泣きである。これは晝には泣かないで、夜に泣くものである。それは晝には、別に變つたこともないが、夜になると泣き出して、何うしても止まぬところは、尋常事でなく思はれて、親に苦勞を懸けることは、一方でない。

其の特徴

此の夜泣きに特徴がある。それは

一　時間を定めて泣くこと、

二　泣く丈泣かなければ、止まないこと、

の二點である。早く言へば、質の惡い泣き方で、之れが爲めに、病氣を惹き起こすことが少なくない。一體これは何ういふ原因であるかといふに、種々あつて、一樣でないが、之れを類別すると、次ぎの六因と爲すことが出來る。

一　襁褓の汚れ、或ひは着物の濕り等より來たれること。

二　二三度、夜に泣いたのが、習慣になつて、其の時が來ると、反覆するやうになれること。

三　夕に乳を飲み過ごして、腹の工合の惡しくなれる爲めなること。

四　便の排泄の、惡しくなれること。

五　腦の異常より來たること。

最も危険なる夜泣き

恐るべき腦膜炎

此外、夜に泣くと疲れて、晝に眠る結果、夜に泣き出すものもあるが、此の中最も氣遣ひなのは、便の排泄の惡いのと、腦の異常より、來たれる夜泣きである。此の二つの者は、密接の關係があつて、通じが惡くなると腦が惡くなり、又、腦の惡い爲めに、便通の惡くなることもある。孰れにしても危險である。

特に腦膜炎となると、晝も泣くが、烈しく夜泣きをするもので、それが時間を定めて、泣くやうになる。嬰兒が之れに罹かると、二三日で死ぬが僥倖にして癒つても、腦の發達が惡くして、痴呆になつたり、或ひは魯鈍にして、物の役に立たぬといもものが多い。爾ういふ理であるから、若しも前に言つたやうに、酸漿を鳴らすやうな泣き方をしたならば、夜泣きよりも、其の病氣の方を、先きに癒すことをせねばならぬ。

普通の夜泣きを、止める方法は、次ぎに述ぶるであらう。

眠らせる法と同じ

夜泣きを止める法

第三節　夜泣きを止める法

夜泣き許りでない、晝でも長泣きをして、嬰兒が難かるときは、之れを止めることをしなくてはならぬ。其の方法は、嬰兒を眠らせる法と同じで、

一　襁褓を取り換へること、

二　靜かに搖り動かすこと、

三　子守唄を唱ふこと、

等で、大概は止むものである。併し病氣で泣くものは、こんなことで止むものでないから、醫者に診て貰つて、手當てをしなくてはならぬ。

夜泣きの癖がついて、毎晩泣く子は、餘程注意して、之れを止める工夫をせねばならぬ。それには寢かす前に、温浴をさせて、襁褓を取り換へ、着物も清潔なのを着せて、程よく乳を與へるとよい。さうすると嬰兒は、

すや〳〵と、眠りに就くものであるが、夜泣きの癖のあるものは、其の時が來ると、泣き出すのである。其の時は乳を遣らないで、暫らく泣かして置いて、空腹になつた頃に、乳を十分に與へると、それを飲みながら、眠ることが多いから、そつと乳房を離して、靜かにして置けば、朝まで眠るものである。斯樣にして二三晩續けると、泣夜きが止んで仕まうものである。

大尾

大正十年四月十五日印刷
大正十年四月二十日發行

定價壹圓貳拾錢

不許複製

雛孃及避雛の新研究

著者　澤田順次郎

發行者　金子專一郎　東京市芝區南佐久間町二ノ二

印刷者　戸田耕司　東京市麴町區平河町五ノ一

發行所　東京市芝區南佐久間町二ノ二　振替東京二八一七五　金子出版部

終